

# 海外農業ニュース

No. 29

昭和47年4月20日発行  
毎月20日発行

## 中國特集

もくじ

### 中国の海外協力

前日本青年海外協力隊事務局長

篠浦公夫

1

### 中国の農業

中国綜合研究所長

城野宏

39

付  
農業ニュース一四〇二八号索引

75

財団法人 海外農業開発財団

## 中国の海外協力（講演）

講師 篠浦公夫  
時 昭和四七年三月二日  
所 経団連会館

### （開会）

岩田理事長あいさつ

お忙しいところお集まり頂きありがとうございました。ご案内とおり中国を中心とした技術協力の問題について篠浦さんにお話して頂きます。

昨今の中国をふまえまして、我々の海外技術協力、経済協力の方は非常な変化が来るであろうことは確かであります。

したがって、アジア閣僚会議のあり方、アスパックに対する考え方、シンガポールを中心の五カ国会議の問題への考え方というものは、中国の出方をみながら考え、あるいは考えなおす面が多大にあることと思うのです。

どうしても平和の基礎にあつては、技術だけを協力するとか、あるいは資本だけで協力するとか、あるいは政治を優先させなければならぬとか、こういう形では今後の世界状勢の中にははまらないものだと思うのです。

広州貿易会議でマレーシヤが中国に深く喰い入ることになりまた。その根底にはご存知の通り現在マレーシヤには九〇万トンのゴムのストックがある。日本円に換算すれば一〇〇〇億円ですが、そのうちの二〇万トンを政府ベースで買って貿易進展に寄与する。これは自由諸国と共に産諸国の中にはありますけれど、ものの考え方

としては、政治、技術、経済、貿易が一本の線にはまらなければ今後はむづかしい状勢ではないかと思います。

#### 教訓的事例

以前ビルマとタイとの境界に六〇%のオイル・シールの鉱山があり、これを開発すれば他の国から輸入するよりも品質も良く、コストも安いものができるということで一億数千万円をつかったことがありました。

ところがいよいよという時にタイ国軍部、陸軍内部とカルテックスその他の貿易大財閥がかくみ合っていることがわかつたのです。

こういう問題を深く研究せずに技術協力をしたという大きな誤り。パキスタンに尿素工場、インドネシアのスラバヤにソーダ工場を技術協力でもつてつくつた。しかし。附帯産業、技術が一致しないのでスクランプになつてしまふ。あるいはボゴールに養蚕製糸工場をつくつたけれど、農村が蚕を飼う、桑を植えるということを研究せずには技術協力したため殆んど草ぼうぼうになつてしまつていて。これは賠償という問題があつたからとはいえ、今後のものの考え方の大きな試金石だと思うのです。

#### 中国の出方

英國のトインビーは朝日新聞の記者と会見のときに、今後の日本の方について非常な示唆を言つておりました。

「今まで中国は文明におくれていてじつと考えていた。そして思索していた。今度、自由圏内に入つて一諸にのりだしてくれば、今までの先進国のやつた誤り、あるいは公害と称するものを全部のりこえて新しい形で出て来るだろう。したがつて我々及びアメリカその他の色々思索したことのあやまりを全部修正して、最良の方法で

突貫するであろう。これは大いに留意すべきである」と、トインビルは批判しておりました。

私どもは今後、ニクソンが訪中したから多少変わるとと思う以上に、我々の今までの技術、経済協力、あるいは政治、技術、資本がばらばらであつてはだめだということを強く考えさせられるのです。

### 中国の施策とは

その根源は、中国はいかなる施策を講じてくるであろうかという問題ですが、本日の講師にお願いした篠浦さんは一〇年以上かかつて青年協力隊を仕上げた方であります。さらに実は篠浦さんは北京大學を卒業され、後ずっと中国におられたのです。外務省にその後入られて以来、今日までの篠浦さんの功績は毎年拝聴させて頂いておるわけですが、篠浦さんは協力隊を各国に送り、足跡くまなくみてその善悪を判断されている。たとえば、タンザニアなどは実際に自分で見て中国の施策をも研究されて来ております。

後から講師からもお話があると思いますが、タンザニア鐵道、一八九五キロのあの大事業を中国がやつています。ニクソンと会見する以前、それも四年前からいかに苦しし、タンザニアの青年を自國に入れ、派遣される人間にスワヒリ語の特訓をし、六〇人以上の医者を鐵道を建設する沿線に送り、醫療施設もととのつた。この大事業はニクソン以前のことですから、こういう中国がいよいよ我々と共にアジア政策、世界政策に乗り出すということになつてきたわけで、大いに考えなければならないことがあります。ここにお集まりの方も、評論家や学者の説、あるいは本などで深く研究され、経験のある方も多いかと思います。

しかし、北京大学を出られ、中国問題については戦前から深い経験

のある篠浦さんに、青年協力隊の実績と合わせてお話して頂くことは、日本にいかに評論家がまた学者が多いといえども、本日のお話し以上に実のあることはないと思うのです。

どうぞ御清聴下さい。

### 篠浦講師の講演

#### 米中会談後の状勢

中国の海外協力という本題に入る前に、ニクソン大統領が北京に行きまして、これによつて今後、どのように変つてくるかということも、非常に大切なことだと思いますので、この点につきまして、私なりの考え方をお話し申し上げます。これから問題として重要な問題は米ソの問題、米中の問題、それに対する日本の問題があげられる。日中の国交回復問題については、国会の場、少なくとも政府自身が直接ハンドルする問題でありますし、また、我々国民が注視をしている中では、変な動き方は出来ないと思います。

一番こわい問題は開発途上国のその土俵の中で、日本と中国、あるいはソ連、そういう関係がどういう型で相撲がとられるか、これは今後に非常に大きな影響をもつてくると思います。

そこで、まず、ニクソンと周恩来の会談後、どのような形がでてくるかということについて、私なりの考え方を若干申してみたいと思ひます。まず第一、私は現在の中国自体、毛沢東が実権者だとは思つていません。現在の中国はもはや、周恩来の実力によつて、周恩来の方針によつて動いています。このことは今後の中国を分析する上の基本姿勢として大切です。毛沢東主席の方針であるとすれば、さほど国際的に大きな変動、自由主義陣営とのつなが

りははじまらないと思うのです。しかしながら、周恩来總理が實際にハンドルするとすれば、柔軟なというか外交に非常にたけた、また国際政治家としても第一級品である実力をもつた人物ですから、今後打ち出す政策というものには、対日問題はもとより世界的に影響を与えるものが出でてくる可能性が強いと思わなければいけないのではないか。その点におきまして、私は昨年八月林彪が失脚したのちの中国の对外政策についてみた場合、中国自体の動き方が過去の動き方とはちがつて来ているとの見方をしています。今度のニクソン、周恩来会談におきましては、双方ともに、やはり、いうべきこと、とるべきもの、あるいは目的といふものに対する双方のぶどまりは、相半ばしていると評価していますが、実質的には中国が実を得たとみています。大体、七〇%と三〇%のちがいで、中国側に有利な会談ではなかつたかと思います。というのは、表にでている問題というよりも、今後、中国が開発途上国、あるいは自由陣営に及ぼす影響を考えますと、二〇%ぐらいは中国側に有利なP・Rではなかつたかという見方をしています。ただ、この問題については、やはり五月のニクソンの訪ソ、ならびに秋の国連の場をみませんと、実際には表面にてまりません。しかし、当然現段階においても、アジア地域に与えた影響は甚大なものがあります。私はこの問題において感じることは、アジア太平洋地区において主導権を樹立するというか、主導権をもつような国に対しては反対するんだという取り決めがあります。私はこの一項を非常に重要視しております。少なくともその対象となるものが日本であり、ソ連であるということははつきりしています。したがつて、單に言葉で書けば一行ですが、この一行が今後日本が東南アジアに發展していく上で、非常に大き

な問題になつてくる重大事であり、米、中のアジア政策の基本的共同宣言と受取つております。この点我国としては十分心にとゞめて政策の立案に当る必要があります。

そこで、今後アジアの問題を論ずる場合留意しなければならない問題は、ソ連との関係だらうということです。ソ連の場合は、インド、バングラ・デッショを中心にしてくると同時に、北ベトナムにも大きな柱がうたれ指導権が打出されてくると思います。しかし、カンボジヤ、ラオスの問題について言いますと、現在の時点に於いては、ソ連は手がおよんでいません。中国側の勢力下にあることは明らかです。したがつて、北ベトナムの問題が今後、ソ連と中国との間に難かしい問題をかもしだすのではないかとみています。それに今度は、アメリカ軍の撤去ならびに今後の和平工作という問題に必らずソ連が一枚加わつてくるでしょう。その問題の解決が五月のニクソン大統領の訪ソの際にでてくるのではないかとみています。

したがつて、五月がすぎるまでは、ベトナムの現状はおそらく悪化をしても明るい見透しはありません。その関係で、問題自体をふまえてみると、ベトナム問題の解決にソ連を無視しては考えられない強力なものになりました。そこでソ連の力関係をみると、軍事力、又は軍事関係経済力に重点をおいて、アジア大陸に集中しており、今後ますます強化される傾向にあると認められる。

次ぎに力を二分するならば、東南アジアはこれから中国の勢力範囲として、中国が伸びてくる場とみなればなりません。その場合若干問題がでてくる可能性は、インドネシアをソ連と中国がどのよう扱うかということです。

その他の諸国については、大方、中国の影響力下にはいる土壤が

あるとみなければなりますまい。

### 中国の海外協力への政治的判断

私が非常に重要な問題として考えているのは、中国が実際に行なつてゐる海外協力という問題です。先ほど岩田理事長もふれられたタンザン鉄道の例をとつてみても、中国の海外協力といふものの姿がはつきりしてきます。

第一に、政治目的がついているということです。これは高次元にたつた政治判断を行ない、計画がたてられ、青写真が出来上ると、それに向つて国内のあらゆる力を結集し、同時に、対象国の方もその中に入れてゆく共同責任体制をとつており、日本とは全く逆になつてゐる。日本は、経済問題が優先して海外協力が行なわれております。したがつて、中国のやつてゐる海外協力は一糸乱れない一本の線が貫ぬかれてゐます。これは共産国の特色でもあります。

### 中国は日本の海外協力をどうみているか

そこで非常に難しい問題として考えられることは、日本の海外協力には輸出振興と資源確保があらゆる面に優先しているということです。あとで申し上げますが、これが日本の海外協力で非常に足を引つばつてゐることは事実です。とくに、この問題に便乗して中国は、今、盛んに日本の経済侵略を P R し、さらに日本は大国意識をもつて非常に威張つてゐると、くりかえし報道してゐるのです。これには二つの狙いがあるのですが、後ほど申し上げるつもりです。これが非常に悪い形となつてでてきているのです。もちろん、我国としては不用意にそういう政策が発表されているということもあるでしようが、たとえ善意であつても相手の立場を十分理解した上で取扱うだけの配慮が必要であることを認識せねばならない。現に開

発途上国ではそういう額面でとられていることは事実なのです。

次ぎに感じられることは、先ほどふれたように中国の海外協力は、少なくとも政府が一つの方針をうちたてそれにあらゆるものと結集して実施する方式です。これには非常にしつかりした線が打ち出されており、途中でフラフラすることは一切ありません。全く海外協力問題については、最優先で決定されております。

#### 日本の海外協力と諸外国のそれ

ところが、我国の状態をみると、最近日本は、G N P の一%に近い〇・九三%をやつていると盛んにPRしています。それでは、それに価値のあるものをやつてあるかというと、少なくとも政府ベースについてみると残念ながら〇・二三%にすぎません。これでは全くお話しにななりません。とくにそれ以外についても、たとえば無償協力についてみても〇・六八%になつていてもすぎません。このように、政府ベースとして〇・二三%ぐらいやつてある現状で、日本が海外協力を行つているんだと考えること自体、経済大国を自称している国としては全くおかしなことと言はざるを得ません。

諸外国は政府ベースが全く優先しているといいますか、政府ベイスそのものにウェイトをおいて海外協力をやつております。したがつて、おもむくいうものがあまりでて来ないんです。少なくとも政策の線に沿つていけるという有利さがあります。我国の場合は、民間の企業におんぶしている面が非常に多いわけです。民間の企業といふものの根本問題は、そこで、ある程度もうけなくては商売になりません。そこで色々な形になつてこれが動いてこざるを得ないのは、至極当然であります。そこに一つの大きな問題が存在しているのです。

## 日本の国内での海外協力への意識と姿勢

とくにその〇・二三%というような小さい数字にしても、それが一つの政策に沿つて動いているのならば結構と言えましょうが、そりではないんですね。たとえば、総理のところにあるいはある特定の実力者のところへ話をもつていくと、それが借款その他の方で案外簡単にきまつてしまふのです。したがつて、政府としてといふか、日本として一つの絵をかいて、ここにこれをやることが眞の協力親善になるんだという型のものではなく、ある実力者によつて動かされるという民主主義の国においてはしない形態が、現実に行なわれております。そこに問題があるのです。したがつて、そういう問題をいかにして打破するかということですが、残念なことに一番大切な国会の場などで、海外協力問題が国の政策として前向きにとり上げられたことがありません。せいぜい外交方針なり総理の演説の中に一行入れば成功と云つたところです。これは国会議員に海外協力に対する認識が少ないと、選挙区でも支援団体にしても、これが票につながらないという我国社会の認識に欠ける点があるからです。我國においては諸外国とちがつて外交問題、海外協力問題に関して、大いに力を発揮した人が次の選挙で黙つていても当選するといふような、先進国並みの政治姿勢がないからです。又日本の国会議員には残念ながら、県会議員か市会議員のやる仕事が多過ぎるのかもしれません。願わくば一人でも多くの眞の国会議員が出てきてほしいものです。そこに日本の海外協力をする土壌があるのかないのかといふことまで考えされられます。国会議員がこの有様では、官僚も本腰を入れなくともやれるという安易な気持ちになつてしまふのではないかと云いたくなります。そのしわよせが民間企業やその他に負

わされてしまうのです。これを抜本的に変えない限り、日本の海外協力はほんとうの意味において、中国のそれと太刀打ちができない。日本の土壤を変えない限り明るい見透しは持てない。我々はそういう現状をしつかりと頭に入れておく必要があるのではないかと思います。

### 中国の日本への態度

次に中国の関係を少し掘り下げて見ましょう。日本の軍国主義復活や経済侵略を大きく取上げていた中国は、最近特に四次防問題を大きくとらえて国内解説などで放送しています。この点日本人以上にもつともっと大きくとらえられているのです。

四次防は大変有名な日本の軍国主義復活の材料となりました。内容の如何ではなく、四次防自体のとらえられ方によつて非常に大きくなり上げられている問題なのであります。

### 日本人の中国問題に対する認識

そこで、中国が言う日本の軍国主義復活、経済侵略問題について日本人が如何に受けとめているかを考えてみましょう。

中国を訪問した政治家にしても、その殆んどはそれをそのまま聞いて帰り、或者はそうだ、日本はもう復活しているんだ。ある人はいやそこまではいっていないが、復活しつゝあるんだという程度で、まるで他人事のように論評している。結果は政府が悪いんだ。今の与党が悪いんだという議論だけで、自分自身がそれを分析して掘り下げて何が国益になるか、又中国の狙いがどこにあるかというとに真剣に取組み、真面目な討議が行なわれていなことは残念至極なことです。この問題は、少なくとも我々一人一人の日本人の頭上に太きくのしかかってきている問題として取組まな

ければなりません。

### 中国のねらい

そこで私なりの分析で話を進めますが、中国のねらいは二つありますとみています。その一つはやはり何といつても日本と国交を回復するときの賠償問題、それの一つの大きな材料、有利な材料として考えているのではないかということです。そこで賠償というものが賠償支払いという形になるか、あるいは経済協力という形になるかわかりませんが、いずれにしても、そういう形の大きな狙いがあると思います。一説では、日本には軍国主義が復活し再軍備をやつている。それは中国にとつて非常にこわいし、先の戦争等によつて大変被害をうけている経験があるので非常にこわがつていて。だから日本には十分気をつけなければいけないということが言われています。それはそのとおり事実だと思います。しかし実際には、周恩来はじめ中国の指導者は、日本の軍事力をそれほど評価して被害意識をもつてはいるとは考えられません。軍事評論家によりますと、中国の現有軍事力をもつてすれば六分で東京を全滅させることができるといわれております。つまり日本の現在の軍事力を恐れる必要はないといふことなのです。むしろ政治的配慮の方がずっと強いと私はみています。しかしながら、このまま放置しておいて日本が段々大きくなるということは、勿論競争相手として非常にこまるわけでですが、現時点において、それをただちに恐怖に結びつける考え方はないといつて良いと思います。少なくとも周恩来首相についていえることは、それほど国際的感覚のない、それほど実情を知らない人ではないし、むしろ次にくるところの賠償問題との関係が、非常に大きなウエイトを占めてくるということが第一点であると言えます。

第二点は、東南ア諸国に対する配慮を重視していくということです。日本の経済侵略という問題についてみても、バンコクの夜など、ネオンに色どられた日本色の空は、日本にいるような錯覚に陥るほどです。最近はバンコクばかりでなく、マニラをはじめ到る所で見受けられます。つまり現実のものとして、すぐ眼につくものがあるわけです。まず自動車ひとつとっても、タクシーにしても、日本の自動車が走っていますし、トランジスターにしてもそうです。

環境的に現象的にすぐ日本の経済侵略に結びつけられる土壤がそこにでき上っているわけです。私が昨年の五月フィリピンに行つた時たまたまフィリピン財界の有力者が中国に行き、周恩来はじめその他の指導者と会つて帰つてきたばかりの時でしたので、その連中に会つて色々話をしました。その時非常に興味深い話をしてくれました。中、フ最初の会談のときに、周恩来首相はまず御国との問題について、第一に国交回復を願うこと以上のものはありませんし、それに大いに期待をもつています。しかし私は決してあせりません。フィリピンの国内状勢がそういう気運になつてから大いに手を結びましょう。しかしその前に、あなたたちフィリピンの人民は、もつと足元をみつめなければいけませんよと言われたというのです。その内容は「日本はフィリピンに経済侵略をしています。したがつて、貿易その他について十分考え方なければいけません」と言われたわけです。およそ外交的儀礼の場では、第三国の悪口をいうことは、外交儀礼上の常識にはないことであり、特定の国において、秘密會議では使うこともありました。公式の場で堂々と使つてきたといふわけなんです。これにはフィリピン側も非常に驚いて、私たちも心配したんだと話してくださいました。

私はなるほどという気がしたのです。そういうことが今後くりかえされるならば、これは大変だ、誰でも最初には疑惑の眼で見、P.R.であると感じますが、次から次へと言われますと、やはり人間というものはそうではなかろうか、日本のやつていることはおかしいじやないかという気になり、それが段々重なると、日本はそなんだ、侵略なんだということになってしまいます。私はそれを心配するわけなんです。根拠のないことを探しているわけではありません。私は年に一回、あるいは二回、東南ア・アフリカをみています。その関係からその移り変りが非常にひどくなつてきてることがわかれます。とくに、一昨年までと昨年とでは、非常に対日感情が変つてきているということをはつきり申し上げられるわけです。そういう状況ですから今後、非常に難しい状態がでてくるわけです。

私はこれから問題に対処するに必要なことは、日本が今後いかなる方針をとるかということを決める場合、もはや日本だけの問題を考えて決める時期ではなくなつてきたといふ認識をもたなくてはいけないということです。かつては日本と東南アのAならAという国との問題だけを考えれば良かつたのですが、ここに中国という問題が入つてきましたので、三角関係になつたということなのです。あるいは下手をすると、ソ連が入る四角関係にもなつてくるのです。

少なくとも、東南アの問題につきましてはソ連を除いて考えられない時期が早晚来る、いやすでにベトナム問題はその主役でさえある、又バングラ・デッシュ、インド等の問題についてはご存知の通りです。

### 中国の海外協力

これから中国の海外協力問題という本題に入つていきますけれど、

ニクソン大統領が訪中した後の動きの中心といふものは、中国がもうアメリカを対象に考えなくて、安心して東南アジアにててこれらという土壤ができ上りつゝあるということです。

中国は今まで、少なくともアメリカに遠慮しながら、東南アジアへの進出を考えてきたのが、今後は独自の方針を強行出来る土壤が出来たということです。したがつてこれからはソ連問題に配慮をおきながらの政策が進められると思いますが、東南アジアではさしあたり大きな問題はないとみてよいでしょう。むしろ中国が優位な立場を堅持して進出してくることを前提に、日本の政策を考えねばなりません。

### 中国の海外協力の典型的な例としてタンザン鉄道を見る

さて東南アジア、アフリカに対する今後の中国の進出を考えるとき、そのパターンといふか手本としては、やはりタンザニヤ問題を先ずとりあげなければなりません。このタンザニヤ問題を一応認識し、分析し、それを土台に考えていけば、これから中国が東南アジアにどのような形で出てくるか推察し得ると思います。そういう意味で東南アジアに入る前にアフリカの問題にふれていきます。

中国は一九四八年一六九年まで、アメリカの国務省の資料では、表に出ている海外援助といふものはゼロであります。しかしこれは北ベトナムはじめ社会主義国に対する軍事費などは別として、少なくとも純然たる経済協力、技術協力問題としては数字が出ておりません。一九七〇になつて、これが七億九〇〇〇万ドルという数字になつたわけです。そのうちで大体四億四一五〇〇〇万ドルがタンザン鉄道に注ぎ込まれているわけです。その他にダレサラム軍港と、もう一つ最近モロゴロ空軍飛行場に手をつけています。これはジエ

ット機が離着陸できるところで、この建設を中国がやっています。

（数字上には全然上つていません）。完成時には、練習機その他は中国から援助を受けるそうですが、現在のダレサラム軍港に関するも、兵器類は全て中国からいっておりまます。それだけでなく、昨年からは指導官も中国軍人になりました。もう一つつけ加えますと、タンザニアの警察関係の特高の訓練は北朝鮮が当つてゐるそりです。

#### タンザン鉄道建設を中国が引き受けた事情

まず考えなければならないのは、中国がタンザン鉄道を引き受けにあたつて最初から、タンザニアが中国に話をもつていつたわけではないのです。はじめはアメリカをはじめ西側諸国にこの話をもつていつたところ、誰も相手にしませんでした。というのは、この鉄道建設は経済効率がうすいという西側の見方がありました。同時に鉄道に手をつけるということは泥沼に足をつっこむようなものであり、つぎこめばつぎこむほど大変なことになるということで、敬遠したのです。アメリカとしては道路ぐらいなら何とかなるだろうということで、ザンビアに鉄道と併行した道路だけをつくることには賛成したわけです。こういうわけで西側諸国は鉄道にはついに眼を向けなかつたのです。

他方中国はケニヤにおいて、アフリカ政策にイデオロギーを持込みうとして排斥をくらつていた時であつたので、タンザニアの申出を快諾し、アフリカ対策の拠点をタンザニアに移すことを決意し、タンザン鉄道の建設に全面的にとりかかつたのです。ところが中国は協定を結んでも全然表に出て来なかつた。それで西側諸国では、中国は大風呂敷を広げて鉄道建設を受けたが、何ら手を打てないではないか、やはり言うだけでまだまだ実力がないのだ、その見

方が大勢をしめ、新聞に発表していた国もありました。各国の外交官もそういう報告を本国にしたそうです。これは非常におもしろいケースで、どこの国も中国は恐らくねを上げてやめるだらうという見方をしていました。

### タヌー党の青年を中国に招請した

ところがその間に中国は何に眼をつけたかというと、一党專制政治をやつているタヌー党に狙いをつけたのです。というのは新しい国を動かすのは、その国の政党である。党的大方針として、これを動かすことがもつとも効果があるということに眼をつけたのです。

先ずタヌー党の若い青年諸君、これから将来幹部になろうとする青年諸君を中国に呼んだのです。日本の研修員受け入れ制度と似たようなものです。ここで興味あることは、現職の役人を一人も呼んでいないということです。役人には少しも眼をつけなかつたのです。

タンザニア、ザンビアの優秀な若手役人は、イギリス、ドイツに留学した者が多いのです。タヌー党の青年よりも政府の若い役人の方が学歴からみると立派であるにもかかわらず、タヌー党の若手を招待したわけです。たしかにタヌー党の若者は学歴等においては役人よりも低くかつたが、建国の意氣にもえた情熱の点では、はるかに役人より優秀であった。これを見ぬいた中国の姿勢が成功した一つの大きな要因と云えましょう。この方針は今後の中国協力には随所に出てくる方程式のようです。即ちどこを押せばどういう形で効果がでてくるかということを事前に十分検討して役人を呼ばないで政黨員をえらんだのです。

この点、西側諸国とはかなり違うところです。我国でも研修員を入れていますが、開発途上国を一律にみて、中堅の役人クラスばかり

りを入れています。

### 心の通い合つた鉄道建設

研修員を呼び入れると、タンザン鉄道の青写真を彼等と一緒につくり上げていったのです。もちろん、一緒につくり上げるといつても主役は中国人ですが、並行して語学の特訓をはじめましたが、それには研修員できたタンザニヤの青年をスワヒリ語の先生に当てて、みつちり特訓をつづけ、両者の対人関係を作りあげたのです。

したがつて、出来上つた青写真というのは中国がつくつたというより、すでにタンザニヤの青年がつくり上げたと言つて良いほどの心の通い合ひをつけだしていたのです。これが成功の強い要因であると言えます。中国は専門家を派遣する場合、現地の人々以上の優遇は与えません。現地の同格の人物と同じ扱いを受けることを大原則にしております。この様に云うと、朝から晩まで労働をしいられる昔のクリーリーと同じよう考究がちですが、現在の工人服を着た技術者には適当なレクレーシヨンもあり、心のゆとりが見受けられます。こういう状態ですが、少なくとも表面上は現地の技術者と同格の扱い、待遇をうけるということです。これが鉄則として実際に現地でなされており、現地の人々の間に溶け込んでいるのです。

### 現地での民衆工作

そこで興味深いことは、鉄道建設だけの話ではなくて、Vjamma（ウジャマ）といつて人民公社的なものを沿線の二一三〇〇ヶ所の村落につくり上げていったのです。この民衆工作は鉄道が建設されることによつて村落、地域がいかに恩恵を受けられるかということを教育し、鉄道輸送と農産物又は地方産業にむすびつけた開発の拠点づくりをはじめ、その第一線で指導しているのが、中国で研修

を受けたタヌー党的青年幹部なのです。

## 六〇人の医者の派遣

もうひとつそれに加えて六〇名の医者を送つた。これも日本や西側諸国の場合ですと、三人の医者を一ヵ所に派遣すると、医療協力云々ということで恩させがましく云いますが、中国の場合医療協力をやつてやるんだということも協定の中には出て来ません。むしろ逆に、自國の鉄道建設員のために派遣するのであって、タンザニヤのために送るのではないから心配しないでほしいという程度のものなんです。しかし現地に行つてるのは、若い青年で、交代もかなり激しくするので病気らしい病気もないというのが実情です。

そこで六〇名の医者が実際現地でやつてある仕事は何かといふと、現地人は医者を見たことがないという者が多く、又タンザニヤの医療制度としては医者に診察を受けるには、六段階を経なくてはならない。つまり五段階目に看護婦にみてもらう。やつと六段階目で医者にみてもらえるが、そのときにはすでに死んでいたと云う話します。

ところが中国から行つてある医者はそういう段階は一切取りません。とにかく直接来なさい、ほんとうに困つたときは夜中でも来てもらよろしいという。こんなことはタンザニヤ人には、かつてなかつたことで、好評を得るのは当然なことです。治療には薬を十分与えたり、ハリも有効に使われているそうです。特に薬よりも、ハリといふものは開発途上国、特にアフリカ諸国においては神がかつていて良いそうです。これは非常に進歩した医学として、西欧医学を施すよりも評判が良いようです。又中国側の姿勢としてはあくまでも、現地の要望に応えると云う方針をとり且つ相手政府のためというの

でなく、タンザニヤ大衆のために援助するのだという基本姿勢をつらぬいているし、現実にそれをどんどんやっているわけですから評判の悪いはずはありません。

## 二エレレ大統領の心配とその解消

ところがニエレレ大統領としては、中国がこれだけの施設をやれば、時期が来ても居座つてしまふのではないかと心配していたようです。といふのは、隣国ケニヤでの中国のやり方をまのあたり見ており、中国の利権獲得、勢力の拡張には非常に注意を払つたことも事実のようです。第一の関心事は一年半から二年で交代という技術者の派遣問題であつたようですが、中国はこれを予期していた如く当初の約束より早く七八ヵ月で非常にはでに交代させました。中国では国内でも鉄道建設をやつてから、建設技術をもつた者は約三十万程度いるそうで、技術の点では少しも心配がいらないのでタンザニヤ側の心配事を解消し、ケニヤでの失敗を繰返さなかつた。現在は推定一万四一千人の中国人技術者がタンザニヤで働かれています。

## 中国人技術者の生活

現在ダレサラム港は中国色一色です。最初は一週間に一回の割で中國船が入つていたが、今では一週間に三回入港すると云われ、他の船は沖待ちをやつてゐるが、中国船は優先的に取扱われている。現地の中国人技術者は鉄道建設に本腰を入れるという態度を打出来おり、他方、中国人技術労働者、技術者もどんどん休暇を利用してレジャー や買物を楽しんでいる。

我々日本人には中国の労働者と云えば、クーリーを連想する人が多いと思いますが、海外協力に派遣されている者にはそのような者

は皆無です。現地での手当は同率に月二万円程度といわれており、食物はじめ生活に必要なものは全部中国側から支給されます。しかし、本国の留守宅に支給される手当は、国内で支給されていた月給の比率によるそうです。

### 中国はなぜタンザン鉄道の建設をねらったのか

中国がなぜタンザン鉄道の建設に狙いをつけたか大別すると次の三点が挙げられる。

第一に、中国がアフリカ諸国にとつて同志的友好国であるとのイメージをうえつける外交的計算。このことはさきの国連において現実に証明された。日本の海外協力はどうかと云うと、政府自身は相当にうぬぼれていようであるが、私は援助額に対する効果の点では及第点に達していないと思う。

ここではつきり言えることは、中国が今度アフリカの票によつて国連に復帰したが、ブラック・アフリカの票固めは、このタンザニヤ、ザンビヤにおける海外協力が大変大きな役割を果したという事実である。中国自身がアフリカ大陸からインド洋にかけての橋頭としてタンザニアとザンビヤにねらいをつけた政治的な判断が重要な点だと思う。

第二点、タンザン鉄道を通じてタンザニアとザンビヤだけではなく、ローデシア、南アフリカ等の白人国とブラック・アフリカとに焦点を合し、国際政治の場における信頼と地位の向上に狙いをもつていたという点です。

第三点、南部アフリカ解放ゲリラに対する影響力を考えたという点です。

タンザン鉄道に関する援助は、五年据置の三〇年年賦償還と言わ

れているが、それでは支払い時期をいつにするか、交換可能な通貨で支払うのか、その問題についてははつきりしていない。したがつて、一説にはザンビアについては銅でもつて解決されるという見方もされているのです。

以上の三点を分析すれば、中国は先づ政治優先の海外協力方式をとつており、今後もこの方式をとるであろうと云うことです。

#### アフリカへの中国の出方

しかしこれによつて、今後中国がアフリカに対し海外協力をどんどん進める 것にはないと思います。それほど中国自身に余裕がないし、中国自身は次の打つ手として、東南アジアに眼を向けていると判断すべきでしょう。それは現地側（アフリカ側）に中国が期待するような土壤が出来ていないと中国自身良く知つている。

#### ザンビアでの中国の物産展

ザンビアで中国の物産展に出会つたのですが、大変大がかりのものでした。これが一年中アフリカ諸国を巡回しているわけです。この主目的は中国を認識させることに置かれており、日本のように貿易振興にのみ血道を上げているのとは大変異つており、我国もこのへんで考え方を転換しないと、アフリカからも嫌われる日も遠くはない様な気がしました。

さてそのザニビヤの物産展の灌漑用水の展示場の状景です。それは三〇〇kmの山を打ち抜いて灌漑用水路を造り上げ樂園とした説明です。「今から三十年前には日本の軍閥によつて、この辺りの民衆は大変な被害をうけ、日々の生活にも困窮していた」この一句は観衆に大変感銘を与えていた。観衆に聞いてみると、現在の中国は大国である、しかしそこまでは日本にやられていたのだ。それが

自分達の力で今日の中国になつた。これが我々にも必要なんだ。真の独立国になるためには自力更生が第一だ。中国のこの啓発工作にも狙つた二つの効果が着々とあがつてゐるよう見受けられた。

### 日本の海外協力の土壤

私はそれで思いだしたことがあるのですが、日本も東南ア・アフリカ等から研修員を受入れておりますが、それらの研修員は何が一番知りたいかと質問すると、「明治維新後、今日の日本を築き上げた努力の歴史」と答える。つまり技術をならうだけなら他の国でもよい。日本に来たのは、同じ有色人種でありながら日本人にはやれたのに、何故我々がやれないのだ。それを聞きたいのだということをよく耳にしたのです。

私はかつてOTCAの初代の国内事業部長をやつて研修の受け入れ責任者だつたわけですが、実際に一貫した日本人の建国努力史を話せる先生が少ないし、又それをやろうとしないことです。新しい科学技術については大変優秀な人はいるが明治維新後、苦しみの中から上、下一体となつて懸命の努力を経た發展史。この發展史を話せる人が少かつたり、話そうとしない、日本という国は。本当に研修員を受け入れる素地があるのか、日本にきた研修員にとつて血となり肉となり、自力更生の精神を養う為に、彼らに一番役立つと思うことを分ち与えることこそ必要である。それには研修員の同じ立場にたつて受入準備をすべきである。研修員との心のつながりを求める所すれば、日本のおくれていた昔の恥部でもどんどん出し、研修員と裸でつきあう姿勢で研修計画に入つていかなければならない。これが日本の受け入れ事業に欠げてゐる最大の点である。

東南アジアに中国はどのように出てくるか

中国の東南アジア進出について結論から言えば、中国はビルマ、マレーシヤに最重点をおいた協力関係を展開すると考えられます。分析根拠については時間の関係から省略します。少なくともビルマ、マレーシヤを味方につければ、フィリピン、インドネシア、タイは労せずして中国の陣営に入ってくるという考え方です。つまりビルマ、マレイシヤ半島の源を押えることが中国の東南アジアに対する政治的な基本政策であると見ております。

#### マレーシヤに対して

マレーシヤについては先ほど岩田理事長が申されたように、昨年五月にはマレイシヤから、又八月には中国から相互に視察団を派遣し、八月には両国間に貿易協定が成立し、四万トンのゴムを買付けなど、マレーシヤに対しては今後も利害得失を度外視した貿易上の協力が進められるでしょう。又中国は貿易面と同時に小規模工業の分野においても農村地域を拠点とした、農機具等を中心とする農村工業の援助が行われるとみており、これは、住民の必要なものから初める大衆路線から開始されよう。

最近のマレーシヤは日本に援助を申込んで来る場合、中国にも要請しているケースが見受けられます。特に、本年二月中旬、中国はマレーシヤから農村開発の援助要請をうけたはずです。これは七二年の後半にも動き出していく可能性があるとみなければならない。中国の場合政治的に決定すると、表面に出る前に基礎工事としてかなりの準備が進められておると見るべきでしょう。これはタンザニヤの例をみても明らかなことです。

#### 華僑に対する中国の出方

中国は先づ華僑を対象にして考えていくから、華僑政策を

みれば中国の動き方がわかるという意見をよく聞きますが、私はこの意見には反対です。六〇年代の前半にはそういう見方も出来ましたが、現在の推移をみると、華僑、共産グリラに對して工作を行ない、優位な態勢をとろうとすると云うようなことは考えるべきではない。玄関から政府間ベースとして取組んでくるのが中国の姿勢とみてよい。マレーシヤの場合、華僑との關係については昨年二月憲法改正がなされ、マラヤ人優先の基本姿勢が決定している以上、中国は内政問題にふれるような挙に出ることは考えられない。

又マレーシヤ政府の貿易実務の責任者等は中国系マレーシヤ人であることも我々は念頭におく必要があろう。

東南アジアの華僑の流れは非常にはつきりしている。一例をあげると、台湾政府の出先大使館の経常費は、大体五分の三は華僑系からの献金によると云われている。献金の方法は、大財閥が直接献金するのではなく、財閥には中国、台湾のどちらにもつける番頭的な組織があり、献金などはその線から処理されています。したがつて国府から中共に変ったからといって、財閥は右往左往することは決してありません。

ただ、マレーシヤの行政機関における中国人の地位については、最近、局長クラスも下げられており、その例を警察官にとつてみると、中国人は警視正以上にはどんなに優秀でも昇進出来ません。この点、中国人系には大変な不満を与えていいるようです。即ち、マレーシヤでは実業界には中国系が絶対的な勢力を有し、官界ではマラヤ系が絶対的である。これは中国にとつて政治的に手が打ちやすいことでもあり、今後の中国の対マレーシヤ政策が注目されます。

### サバ州に對して

最近ある本に中国はサバ州に積極的な農業協力をするであろうと書かれていましたが、私はその説には反対で絶対あり得ないと思つております。その理由として、サバ州には現在中国の援助を受入れるような環境が出来ていないと云うことです。共産ゲリラとの関係マレー・シヤとの関係等々、むしろ現状通り中国米を輸出することの方が中国にとつて得策であり、政治的効果を期待出来ないことを熟知していることが挙げられる。

### インドネシアに對して

スハルト大統領が二月にオーストラリア、ニュージーランド、フィリピン等をまわっています。これは中国を対象に地域的な経済協力機構、軍事協力問題を話合うためだつたと云われています。

ここで興味あることは、インドネシアの考え方とは逆に、中国はインドネシアを、アジアにおける中国の代弁者と云うか影武者として活用したい意向が強いと思われることです。中国が狙つてくるアジアの政治問題としては、エカフェ等の国際会議の場を通じて中国自身が旗を振るけれども、東南アジア側（開発途上国）から旗を振る国として中国はインドネシアの活用を期待していると見受けられる。

東南アジア諸国では華僑学校は閉鎖されおりますが、インドネシアでは現在三〇校ぐらい開校が認められています。つまり、インドネシアでは華僑の経済力の必要性を痛感し、華僑対策を変更した証拠です。したがつて中国はインドネシアに特殊なつながりをもつてくると見なければなりません。今後のインドネシアはアジアにおける政治の面で如何なる出方をするか、中国との関連において十分注

目する価値があります。

#### フィリピンに対して

中国はフィリピンに対しては自分から積極的な手を打たず、むしろフィリピンが出て来るのを待つという態度をとるものと思われる。すでにレイテの州知事が二月には周恩来にも会つております。マルコス夫人が三ヶ月以内に中国を訪問をするとも外電は伝えています。情勢としては、中国の狙いどおりに中国自身が手をうたなくとも、フィリピンに対するアメリカの援助削減と反比例して、中国に向つていることがはつきりと出てきています。恐らくこの情勢は今暫らく続くものと思われますが、マルコス自身の考え方も次第に中国寄りになりつつあると云えましょう。

#### タイに対して

タイに対しては、中国は直接手をつけずにおくのではないか。タイは人口の約一〇%が中国系です。そのうち三〇万ぐらいが華僑で、その他はタイ国籍になつております。タイに生れた軍事政権は、中国の国連復帰に対応すると云うより、国内問題を考慮したものであつて、直ちに治安その他に関係したものではないと思います。たしかに北方に二部隊、南方に一部隊の共産ゲリラがありますが、現時点においては、これはあまり重大に考へる必要はなく、むしろアメリカが西海岸の石油開発計画から手を引くということ、又国内の特需関係等からみて国内の引締めに先手を打つたものとみられ、中国に対しての直接処置とは考へられない。たゞ、中国は外交上タイに働きかけを強め、タイ国内の親中国派の活動を援助するであろうが、経済協力関係では積極的な援助は行つてこないとみてよいでしょう。タイの外交は常に両面作戦をとつており、どちらにころんでも甚大

な被害を受けない国民性をもつておることも参考とすべきでしょう。  
ともあれ、中国はタイに対し積極的な態度には出ないとと思われる。

#### ラオスに対して

ラオスとネパールについては、中国は積極的な態度に出てくると思  
います。ラオスに関しては早ければ本年度後半には具体的に何ら  
かの手を打つてくるものと予想しております。ラオスには、ペトナ  
ムやカンボジヤとは異質の国内条件があること、又大国の直接介入  
がないこと等が容易に中国の接近を早め、中国の政治的働きかけが  
強行されることが予想される。今後ラオスが社会主義国家になるか  
どうかは今後の戦果と、民衆把握によつて決まつてくるでしょう。  
こゝで大切なことは日本をはじめ自由陣営がラオスに対する援助の  
手を抜いてはいけないということです。ラオスの将来は、この一年  
で決定づけられるとも云えるほど大切であると判断しており、今こ  
そ人道的立場において積極的な援助を行うべきであります。その場  
合考慮すべきことは、人道主義的立場における援助、無償協力をヒ  
モ付きでないものでどんどん援助すべきだということです。

#### ネパールに対して

ネパールは現在大変微妙な立場におかれしており、中国は現在もか  
なり思い切つた援助をしておるが、今後は一層強化されるものとみ  
られる。ただネパールの場合、国際政局において非常に危険な立場  
におかれており、これがこの国に与えていける影響は極めて強く、同  
国の発展に暗い条件となつてゐる。インド、ソ連、中国という大国  
の谷間になつてゐるネパールの今後については、最大の関心を払う  
べきですが、日本としては、ネパールに対する大国の態度とは關係  
なく、人道的立場から積極的な援助、協力をすべきです。

## 日本の海外協力について

日本の海外協力は如何にあるべきか、一言にして云えれば政府の援助額を思い切つて増やすこと、近視眼的に目先のことのみ考えないこと、被援助国の立場に立つて行うこと、以上である。

援助や協力が三年や五年ではね返えつてくることを期待するならばむしろやめるべきである。海外協力というものは一〇年から二〇年という長いマラソンだと考えるべきである。思い切つた援助をすることによつて、それはねかえりが政府関係だけにかえつてくるのではなく、長い眼でみて何らかの形で双方の関係にはねかえつくることが、海外協力の真の姿であり、狙いでなければならぬ。

日本が考えなくてはならないのは、資源確保とか貿易振興とかが前面に出るのではなく、相手の立場に立つた善意の協力をすべきだということです。海外協力は、常に相手の立場にたつて、相手が自立更生できるよう心の通い合つた援助協力を行うものでなくてはいけない。それには政府がヒモ付きてないものを政府自身でやる以外に道はないのです。一企業がそれをやろうとしても無理なことは言うまでもありません。最近、四次防問題が大きくてていますが、日本が再軍備しなくてすむには海外協力以外にないとと思う。いくらきれい事を言つても、経済が伸び、産業が発展していくといふことになれば資源の確保に力を入れざるを得ない。それには必然的に過去の歴史が物語つているようなものがくり返されてこないとは誰にも保証できません。したがつて、それを打破できるのは、ほんとうに生きた海外協力以外にないと思うのです。腹が立つてケンカしてもなぐり合えるほどに相手と知り合つて、肩を叩き合つて気持の通ずるためには海外協力しかありません。それには政府が思い切つた援

助、協力を行なうべきであります。

今、日本にとって一番必要なことは、国内の社会問題もざることながら、日本の将来を考えれば、海外協力問題が国会でも真先にとり上げられて審議されるぐらいの重要な政策となることです。

とはいえ、現在の日本の海外協力がそのまままで量さえ増やせば良いほど簡単なものではありません。少なくとも実施全般について考えなおす必要を痛感します。機構、姿勢についても官僚的な考え方ではなく、流動的な開発途上国に対処できるように改革する必要があります。又、海外協力にたずさわる者の姿勢についても常に自分をまないたの上にのせて、自分のやつていることが正しいかどうかをぶりかえつてみなくてはならない。もし間違っているなら、いついかなる時でも改めるだけの勇気と責任感をもつてもらいたい。

とくに今後の海外協力においては、中国がやつてているような、といふよりは私が昔から言つて来たような、相手国の立場にたつて心の通い合う、相手に愛される協力をすることが大切です。その意味において、青年を扱う青年協力隊は技術ももつてゐるし、相手の中に飛び込めるという青年の力、若さでやつてきたことを正しく認識し、海外協力の中に織り込んだ正しい位置付けが必要であると思います。協力隊自体についても今後のアジア情勢では、実施の方によつては早晚問題が出て来ると思います。先般香港で国際問題の専門家である中国人と話をしたとき、中国も青年による海外協効果があると思つてゐる。しかし今は残念だが自信をもつて青年を海外に出せないが、当然考慮に入れた海外協力の計画が進められるであらうと言うのです。

ともかく、今後の海外協力問題で非常にむずかしくなることは中

国が一枚加つてきたということです。近い将来具体的に種々の問題が出てくるでしょうがそういう土壤ができ上りつつあることを認識すべきです。実施に当る者が役人的な安易な考え方で量さえ増せばよいと云う現在のやり方では、反感を招くだけに終りそうです。今後の日本の海外協力は、我国にとつて如何に重要な課題であるか、政治家も政府も民間も、関係者一同が一体となつて考えてみる時期が来ていることを痛感します。

民間商社に希望したいことは、もうけることばかりを追求するのではなく、そこにも必要な血となり肉となるものをつくり上げていかないと、気がついた時はアジアの孤児になつていたということになつてしまふのではないか、そういうことを心配しています。

時間の都合で大略的に終つた部分もございますので、ご質問して頂ければお答えします。

司会 引きつづいて質疑応答をおねがいしますがどなたからでもおっしゃつて下さい。

「質問」 私も専門家として東南アジアに行つて、お話しになられたようなことを実際に考えて早目に帰えつてきたのです。お役所が考え方を変える見込みはありますでしょうか。

「応答」 他人が変えるのを待つていてはダメです。一人でも二人でも変えていくことをやつていかなくてはダメです。変わる見込みがあるかどうかでなく、変えさせるように努力することです。

「質問」 私も機会ある毎に言つてますが効果がありませんね。

「応答」 効果のあるようにしようじゃないですか。海外協力問題というものの、特に開発途上国の問題は経済協力を母体にして考えるべきでしょう。開発途上国との外交はパーティや為政者と話し合う

だけではなく、協力、援助に重点を置くべきでしょう。

「質問」 個人個人が不適格というのではなく、國の方針が変わることかということですが。

「応答」 それはお役所だけが悪いのではなく、政治家をはじめ国民の考え方を変えていくべきです。

「質問」 今のやり方は効果を急ぐわけです。一〇年待たなくては実効の上らないのを二、三年でとせかせるんですね。

「応答」 今、日本には海外協力を真面目に考える国会議員が少ない。ほんとうの国会議員がでてくれば変わってきますよ。もし変わらなければ日本は孤兎になってしまいます。

「質問」 もう半分孤兎になつていてのとちがいますか。インドネシア人、中国人でも親しい人から忠告されるんです。これでは日本はだめですよと言われるんですね。

「応答」 私もその点を一番恐れています。私もこの一〇年間毎年諸外国を歩いてみて、そういう動きを感じておりますが特に二年前くらいから非常に変つてきました。年末各国を歩いたのですが大変な変わり方です。早晚問題が出てくるような感じをうけました。然し、問題が出る前に姿勢を変えなくてはいけないと思うのです。

「質問」 中国はアジア、アフリカ以外の大陸にもアプローチしていますか。

「応答」 現在、貿易問題で中南米からボールを投げかける形勢があります。四月十三日からチリのサンチャゴで開かれる国連貿易開発会議がありますが、その関係からアプローチした形跡があります。たしかチリに対する援助協力問題が出てきていますが、これはチリ側から中国に対して調査団を招請するような形で、今度の

会議を利用して何らかの芽が出て来そうですが、具体的には今のところ何もありません。

「質問」 最初中中国がケニヤにイデオロギーをもち込んで失敗したが、次にタンザニアで中国が大変な成功を収めているようですが、その後ケニヤはどのような判断をしておりますか。

「応答」 東アフリカ三ヶ国には貿易協定があつて、三ヶ国の年間貿易の基本ができているわけです。ところが中国が今度援助するに当つて、中国からの製品をタンザニアは買うことが取り決められておるため、今年はケニヤからの買付けをやつております。これは近い将来二国間で問題化することが予想されます。

もう一つタンザニア国内で難しい問題は、タヌー党の若手と政府の若手との間に対立が芽生えてくる可能性が考えられる。例えば予算編成に当たり、省内又は政府事業体の内に目付け役としてタヌー党員が常駐しており、この者の承認を得なければ正式に省の予算編成が出来ない。これは中国のやり方と同じシステムです。今のように権限が違えばあまりケンカになりませんが、感情的には役人側にたかぶりがあるようで、この解決は指導者の課題と云えましょう。

「質問」 台湾問題に対する常識というものを我々はどのようにしてばよろしいでしょうか。

「応答」 私も皆さんと同じように台湾には友人もおり同情もしています。しかし、いまさら中国が二つなどというのは間違つており、中華人民共和国政府が唯一の政府であることははつきりしています。国連をみても現実問題としてはつきりしています。政府が現存しております。古来からの領土を治めておるもの、それをとやかく言うことは過去の世界史においてもないことです。

又現実問題として、國府の蔣介石政權が台灣に逃げた時、アメリカはじめ自由陣営諸國は当然の領土として保証したことは事実です。その現実問題からみても台湾が中國の領土であることは明確です。國際法からみてもはや異論の出ようはありません。ただ一つ残るのは日華条約の問題です。中共が全土を統轄したのは昭和一四年で日華条約を結んだのは昭和二七年です。その間三年経過していたことは事実ですが、当時の日本の立場は自由に物を言える立場でなかつたことも事実です。然し現在の日中関係は法律論で片付く問題ではなく、感情問題も含んだデリケートな問題になつております。

そこで中国の唯一の政権は北京政府であり、台湾はその領土であるとはつきり認識すれば、前条約破棄の問題は個人的な感情をぬき國家的見地に立つて高度な政治判断により善処すべきであり、必要なことは先づ中国政府と国交の回復を決定することが先決です。その上でトラブルを如何に善処し円満に解決するか、それこそ政治家や外務省の重大な責任であると思います。この際国会議員も、何党、何派と云うのではなく、我国の国会議員としての態度をもつてもらいたいものです。

又当然のことながら手をさしのべていかなければならぬのは日本側であり、戦争が終結していない状態にあることを念頭において、相当の腹がまえで礼儀を尽くすべきだと思います。

「質問」 今後中国は東南アジアに強力に援助協力を推し進めてくるということですが、中国自体にそれだけの余裕、資金力がありますか。それとも余裕なくボチボチということですか。

「応答」 中国がタンザニアに援助、協力をした當時、余裕があつたかどうかをみれば今後の中国の出方もはつきりわかつてきます。

現在、衣料の配給をしているのは、東南アジアでは中国と一番国民所得の低いと云われているビルマだけです。中国の場合資金に余裕があるなしと云うことより政治的決定が優先すると云うことです。政治的判断を下せば国内のあらゆるもの犠牲にしても、やるというのが中国政府の方針と思われます。そういう点から現在眼に見えている金がどうであるかでなく、やる能力と可能性が強いと見るべきです。日本のように金があつても思惑がからんで中途半端なことをするのではなく、目的のためには他のものを犠牲にしてまで注ぎ込むということですから、これは恐ろしいと思います。

「質問」今までの日本とこれから進出してくる中国とは現地においてどういう関係になつてきましょうか。

「応答」その関係が具体的にわかれれば苦労はないと思います。中國の動きが具体的に出て来ないところに問題点があり、それを模索しながら対策をとつていいくのが今できることではないでしょうか。

東南アジアで重点的に見られるのは、ビルマとシンガポールを含めたマレーシヤで、ここには政治的な観点からの援助が行なわれると思われる。中国の援助体制をみると、現在の日本のシステムでは対抗できそうもありません。今後の援助、協力には資金援助だけで勝負がつくものではなく、最後は人間による協力によつて決まつて來るとみています。そこで、技術協力が非常に重要なこととなつてくるし、商社の出先の人と現地の人々とのつながりが大切になつてくるわけです。日・中間に国交の回復がない限り「軍国主義」「經濟侵略」等中国はくりかえし行なつてくると思います。その中で協力し合うのですから苦労多いこと、思います。

つまり、これからは一つの土俵の中で日・中開発途上国の三角関

係の相撲をとらねばならないので、どちらが開発途上国的心をつかむかが鍵になつてくると思います。要するに人間対人間のつき合いができるかどうか、信頼し合えるかどうかということでしょう。

これから東南アジア諸国と親善友交の面を求めていくには、外交官ばかりにまかせるのではなく、外に出た人各人が現地人をいかにつかみ、信頼を得るかが大切なことで、中国との間にも競合するのではなく、相互に協調し合いながらもつていくということです。東南アジアで協調し合い、それを伸ばして中国本国との技術協力の分野までのばしていく腹構えをもたなくてはいけないのではないか。現地ばかりではないということです。

「質問」 そうしますと、中国は採算のとれないような農業開発に進出してきて、日本はすぐ市場に出せるような工業の開発に重点をおくという二つの方向に分かれるということでしょうか。

「応答」 いえ、中国は農業協力にはあまり力を入れないでしよう。一つの例ですが十二年前ビルマで当時参謀副長だったオンジー氏が屯田兵制度というものをつくったとき、最初に中国が援助に当つたがボイコットされ、次にアメリカからの機械援助も断り、日本に協力援助を要請してきたことがありました。

そういうこともあります、現在の中国自体は農業協力の分野にはあまり力を入れておらないようで、むしろ民衆の生活と直接すぐ結びつく小工業に進出してくる傾向が強いと思われる。とくに、ビルマには農業機械や繊維工業の面が考えられているように思います。恐らく、この傾向は他の国々にも一応考えられましょう。しかし、東南アジアにとつてはまだ農業協力は重要で必要な分野であり、前にも申しましたが日本政府は積極的に資金、技術両面でじっくり腰

を据えてやつていくべきだと思います。

「質問」 シンガポールに対しては現在ソ連、イギリス、日本その他の国が激しく進出し合っていますが、中国はここに対してもどういう態度をとりますか。

「応答」 中國側から眼にみえるような援助というものはしないと思ひます。むしろシンガポール側からの出方で今後の関係が生れると思います。たとえば、最近船舶の運行契約がシンガポール側から要請し決つたようですが、中国がシンガポールに進出する方法としては、貿易の面を通じ、特に日用品に重点がおかれているとみていますが、シンガポール国民の对中国観を強めることに重点をおき、経済的に度外視した製品をだすというやり方をとると思ひますが、政治的には過激な行動に出ることはないと想ひます。他方、シンガポール側も李首相自身温厚な民主社会主義国家の建設をモットーにしており、中国に対しても、その基本線でアプローチが行なわれるものとみております。

「質問」 タンザン鉄道の技術協力に対し中国が大量な人員を送つたとのことです、今後日本もそういう形をとるべきでしょうか。

「応答」 私は経済協力、技術協力において一度に一ヶ所に大量の人を出すということはマイナスの面が多いと想ひます。

タンザニアの場合は鉄道建設ということで、現地の技術のない者を教育しながら進めていったのでは何年かかるかわからぬ。それを七年の予定を四年でやつてしまおうとして技術をもち同時に重労働をやれる者を送り込んだので、中国の場合政治的配慮から出たものであつて、通常行つてゐる技術協力とは別なものであると理解してよいのじやないでしようか。だから現地で鉄道建設の技術を教え

て いる と い う も の で は な く 、 見 方 に よ つ て は 戰 場 と 同 じ よ う に 自 国 の 偉 力 を 誇 示 し た も の と も 受 取 れ ま す。

「質問」 ネパールについて話して下さい。

「応答」 ネパールへの援助は非常におくれ、海外援助の谷間ともみられていきました。軌道に乗りつゝあるのは、ここ三、四年です。大型のものは中国からの道路で、巾二〇一五〇メートルの立派な道路がインドまで通じました。今はダム計画を進めています。中国がやる場合、なかなか数字がつかめないし、数字より多くのものが実際に動いています。

ネパールには農業と医療に協力援助が必要だとされていますが、中国は農業関係には手をつける意志はないようです。ただ民生向上福祉ということで医療協力に力を入れる様子で具体化しつつあります、これは中国側から計画が出されたわけです。道路、ダムにしても同様です。というのはネパール側から要請を出すということはしません。これは悪気があるとか頭を下げるのがイヤだとかいうことではなく、ネパール側としては援助国側から具体的に援助計画をもつてきてくれればそれで話はOKだということなんで、日本の場合相手国の要請がなければ援助、協力は行なわないと云う原則を打出しており、これではいつまでたつてもイタチゴッコになりかねない。このへんで、日本も気のきいた協力方式を打出さなければ、開発途上国から総スカンをくいかねない。

現在、日本からも協力がなされていますが、問題になることは十分な基礎調査がされていないことです。雨期には全く交通がしゃ断されてしまうのに、調査は一番条件の良い時期に入やすいこともあつて調査、計画を進めてしまう。調査とは時期の悪い時も含

めて半年ないし一年は腰をおちつけて調査し、結果が直ちに実施計画になつて具体的に動いていくのでなければならない。

「質問」　中国の援助、協力が政治的判断で行つていると同時に人道的な配慮も行なわれている。この両極端が一諸になつて援助、協力が行なわれていることを我々はどう整理し、うけとつていけばよいのでしょうか。

「応答」　中国の場合、海外協力の基本姿勢は政治的判断により外交上、政治上に最重点が置かれ、どのくらいの援助をすれば自力更生につながり、失敗がないか等政治的な配慮効果というものを第一に考えるわけです。そこで一つのプロジェクトを計画する場合、自力更生ということで、国民大衆の側にたつていかにプラスになるかということが政策の中心の柱となっています。大衆路線というものを常に配慮していると云えましょう。

「質問」　華僑をどのようにとらえていけばよいのでしょうか。

「応答」　実業界、経済界をにぎつっているのは華僑ですから度外視はできません。華僑というのは本来その国の国籍をもたない者のことですが、通常華僑と云つても六〇年代の初とはちがい、今ではマレーシヤ、シンガポールの中国人は夫々その国籍を持つており、正確には中国系何々といふべきで、華僑というものに対してはつきり区別した認識をもたなくてはいけないと思います。

東南アジア諸国との経済問題を論じる場合、中国系を抜きにしては考えられないほど強大です、今後の活動傾向としては次第にその国の国民としての行動を取つてくるでしょう。今後は中国系と華僑といふものをはつきり分けて考え、昔からの華僑への考え方を捨てない限り東南アジアの問題は混乱して誤解を招くと思います。

## 中 国 の 農 業 (講演)

講 師 城 野 宏

日 時 昭和四六年十一月十二日

場 所 経 団 連 会 館

中田 農業開発研修センター理事の三橋さんが、ちょっと遅れてお  
りますので、財団の理事長の岩田からごあいさつさしていただきま  
す。

岩田喜雄 中国問題はあえて私から申しあげるまでもございません  
が、中国が貧農路線によつて、数億の人民が農業の発展に真剣にと  
り組んだ時、日本を含め東南アジアにどういう影響及ぼすかといふ  
ことは、イデオロギーとか政治を抜きにして、私たちアジアの農業  
問題に关心をもつ者から見れば、ひじょうに大きな課題になるとい  
うことは皆さんご理解なされることと思います。

古い話ですが一九二一年ローマで世界優生学大会があつたのであ  
ります。その時早稲田大学の内田和民先生が日本の代表としてロー  
マに行かれ、お帰りの時にシンガポールに立ち寄られたのです。わ  
たくし当時シンガポールを中心にして農業問題で、大倉喜八郎さん  
の所に関係しておりましたので、シンガポールに集り優生学大会の  
話を聞きました。そのとき、内田先生の言われるには、ローマの大  
会では、将来ゲルマン民族が世界の中心的民族になるか、あるいは  
ラテン民族になるか、色々の意見があつたが、その中でも百年後には  
漢民族が世界を制はするのではないかという論議があつたという  
ことを承つたのであります。ところが中国の歴史をみると農業路線

がいつも下敷きになり、権力の中核はいつも富裕農層を中心に支配されて今まで来たことがわかります。今度の毛沢東路線が本当に彼の思想の中心である貧農路線、あるいは中農以下の路線で成功した時、そしてあれだけの体格と国民性を持った民族をいしづえにして、毛沢東路線が本来の目的を達成した時、アジアの農業は色々な面から影響を受けると思うのであります。具体的には大豆の問題、とうもろこしの問題、あるいは広東、海南島を中心とした亜熱帯植物の問題、あるいは米、棉などについて、私たちは今後大いに研究検討しなければならぬと思うのであります。これらの各論については追つて逐次講演会、研究会をもつことにいたしまして、本日は中國問題について、ひじょうに深いご理解をもたれておられる城野先生に、中國問題の序論と申しますか、大きな観点からお話を願うことが出来れば、今後各論に進む前提としてひじょうに有意義なことと思つてお願ひした次第であります。

中田 それでは共同主催になつております農業開発研修センター理事の三橋さんから、一言ございさつをお願いします。

三橋誠 本日は先ほど申されましたように、その道の研究者である城野先生から色々お話を承つて勉強しようという事ですが、じつは私のところの全購連としては十数年前から、中国の農協の購買販売連合会であるキョウ商合作社とお互いに交流しようという事で行き来しておるのであります。しかしここ二、三年向うが来る番なのに、來ないという状態になつています。日本の農業関係の代表者が日本の代表者だということを周恩来首相が言つておりますが、私たちとしては今すぐ行く必要はありませんので、あえて中国へ伺うとは言つておりません。私最近ひじょうに関心をもつておりますのは、中国か

ら野菜を入れたとか、牛肉を入れるというような事を商社関係で言つてますが、こういうものがジャンジャン入つて来たら、たいへん問題だと考えております。それから数カ月前から台湾の冷凍野菜が日本に入つて来るといわれているが、これは困つたものだと考えておつたわけです。むしろ中国と交易をして、日本に不足した時に入れてもらうというような調整を話し合うためにあちらへ伺いたいというふうに考えているわけです。本日城野先生はどういうお考えであるか、いろいろお話があると思いますが、農業団体としてはもうすでに十年も前から交流しておりまして、当時の陳毅外務大臣も「もう農業団体どうしで貿易をやる時期が来ておるなあ」と言わされました。しかしそうやたらに牛肉を入れられたり、商社の手で野菜を入れられたら、今でも日本の農業が混乱しているのにますます困ると思うんです。この席をかりましてそういう問題点があることを一言申し上げ、私のごあいさつにさしていただきます。そういう点についても城野先生からいろいろお聞きしたいと思つていますので、どうぞよろしくお願ひします。

城野講師 城野でございます。今日中心課題として出されました問題は、中国の農業がけつきよくアジアにおいて、どういうふうな影響力をもつだらうかということだと思います。この問題を大戸君から出されたのですが、今日これからお話することが、それにびつたり合うような答えになるかどうか、ちょっと疑問なんです。この種の推定はなかなか難しいと思うんです。それで今日は、皆さんがどうすれば中国に関する理解を深められるか、いわば日本での中国に対する理解の仕方と言いますか、そういう事についてお話を申し上げます。

多過ぎる中国情報 このような前提を置きまして、それじゃ中国といふものをどう見たらよいか、その農業をどう算定したらいいかといふ問題になつてくると思いますが、これは単に情報がある、ないの問題でなくて、入手しうる情報をどう取り扱い、どういうふうに分析し、推理したら本当の姿がつかめるだらうかという事になると思ひます。中国の問題について、現在日本ではたくさん情報が出ています。おそらく中国についての情報が一番たくさんあるんじやあないかと思うんです。本屋へ行きましたも中国問題を扱つた本は、一角をなしてズラット並んでおります。アメリカについてもかなりあります、中国に関する本はみんな日本語になつてゐるんで、日本語になつて出ておるデータ、資料というものは物すごくたくさんあると思うのです。たくさんあるので、あれこれと読みますと、みんなちがつた事が書いてある。そのために本当にこれは右なのか左なのか、白いのが黒いのかどうも見当がつかないというような事になつて来るわけです。とくに中国については情報過多の状態にありますので、これを整理して実態をつかむには、かなりの工夫を要するのではないかと考えます。

二つに分かれる中国情報 今、中国について流されておる情報を、簡単に分けますと、くさし派とほめ派の二つになると思うんです。くさし派といふのは中国は大変悪い所だと、なんでもまあくさす事になつています。政治的にも混乱しておつて毛沢東という独裁者が居つて、共産主義つていう悪い事をやつておつて、そのため強制労働の苦しみを受け、文化も弾圧されている。だから経済はさつぱり発展しない。通り文句になつてゐるのは大躍進の失敗、人民公社の失敗によつて中国の生産力は大きく低下した。まあそういうふう

な事がいろいろ書かれております。果たして低下したのか大きくなつたのか、書いた人自身もあまり自信はないのではないかと思うのです。いろいろの数字、たとえば国連統計とか、あるいはその他ホンコンで作った数字だとか、そういうものを見てみます。どちらにでもとれる事になります。躍進した発展したという結論を出すこともできるし、低下してもう駄目なんだという結論を出すことも出来ます。だからそういう数字そのものについても、どういう所から出て何をここで表わしているのかという事をよく考えなくてはならないと思うのです。一方ほめ派は中国については、なんでもほめる事になつています。毛沢東という素晴らしい人物がおつて、ちゃんと統制がとれており、混乱がなくて、国民の目が輝いておつて、張り切つて働いていて、経済は発展しているというのです。なんでも立派な事になるわけです。実際に向うへ行つて見てこられた方の報告でもこの二種類になつているんです。ほめる方は立派な所をみんな見てこられて、その立派な所を報告されますので、あれだけの大きな所が全部立派になつてゐるような印象を受けてしまう。ところがくさす方になりますと、色々さしていいような場所をたくさん探して来て、それを集めてやられますので、あの大きい所が全部駄目なような、そういう格好になつてしまふのです。これはやはり手法の問題だと思います。発表のプロセスなり、整理のプロセスが問題であつて、実態的一面を表わしていても、全面的な観察になつていないうふに思います。これは中国に限らず、日本、ヨーロッパ諸国、アメリカ、あるいはアフリカ、アジアなど、とにかく世界中どこの国についてもそうです。立派な所もあり、あまり良くない、まずい所もあると思うのです。これが物の実態だと思います。

## 中国のイメージと実際

だから中国についても同じことであつて、

悪い所とか良くない所とかを探し出せばあんなに広い所ですから幾らでもあると思うのです。特に中国については、裏だけを見ようとか、表だけを見ようとか、極端な姿勢がかなり流行しておりますので、まずその辺から正す必要があると思うのです。日本国内のニュースになりますと、かなり正確に理解できるというのは、実際に國內で生活し、表と裏をちゃんと見ておりますから、あまりだまされない。たとえば殺人事件は稀れにしか起らないから、事件としてニュースになるわけです。中国の問題も同じことで、新聞とか雑誌とかにワーッと出るような事はやはりニュースです。同じように、毛泽東選集かなんか持つてワーッと言つている連中の写真が出たり、毛沢東思想教育のなされている状況として出されたり、労働模範とか、労働英雄とかの事蹟が出たりします。そうするとそういう人物が八億全部であるかのような気がしてしまいます。これは間違いだと思います。八億の人間全部がそうなつてゐるよう感じさせ、みんな筋金入りの、人間離れした共産主義者だというイメージを作り上げて、中国の人間はみんなこんなになつて、こうやつているんだとしている。そのような設定をして中国の政治問題、経済問題、また農業問題を理解しようとしたら、これは出来っこないと思うのです。いちばん根本的なことはなにかといふうに極端な事を拾い上げて、つまり日本との共通的な基礎を抜きにして、特異性だけを取り上げてゆきますと、中国という所はそこに住んでいる人間もなにか人間離れしていて、気違ひじみた人間がやつとするような気がしてきます。そして農業生産なりその他の生産にしても、何か特別のものが存在するような気分で問題を見ていく。問題の観

察にはその姿勢が大事であつて、それが正しくなければ眞の実感はつかめないと思うのです。

**中国を見る目** それで中国と日本の関係については共通性が主だらうか特異性が主だらうかと言うと、私はやっぱり共通性が主だと思うんです。やはり生きている人間の生活が中心になつていますから、物に対する感じ方なり、生活の姿勢なり、社会生活上の規約的なものについては、共通性の方が多いと思うのです。ちょっと冗談のよう聞こえますが、目が二つあって鼻が一つあるという基本的事実は、人間としての共通性であります。この共通性が主だという事を根本にして、特異性というものを見なければ中国の特徴が分かりません。特異性だけが存在しているのであれば、全然別箇の世界なのであって、理解できないはずです。共通性が主になつてゐるから理解も出来るわけです。ですから先ほど申しましたほめ派にしてもくさし派にしても特異性だけを、日本と非常に違つた点だけをとりあげてうんぬんしているのです。だから中国問題の観察ではそういう共通性というもの、基本的な事においてはあまり変りがないという観点に立つて、しかし同時に特異性がくつついてゐるというふうに見て來ると、割合に正確に中国が認識出来るのではないかと考えます。特異性だけを取り上げて、中国はああだこうだ、と言つてはいると、まつたく化け物みたいな人間や氣違いじみた社会がそこに書き出されてしまう。こういう觀察は、本屋にたくさん並んでゐる本の中にはなりあります。みんなその人たちの得てゐる概念と言いますか、中国についてのイメージは、かなり特異性を主にしていて、とんでもない違つた社会であり、とんでもない人間が住んでゐるというような印象を強いているようです。その辺を修正して問題を観察して

いく必要があるかと考えます。これは観察に際しての基本的な姿勢の問題だと思います。

**日本と中国農業の相違点** そこで中国の農業という事になりますが、この特異性と共通性、とくに共通性を根本に置いて特異性を調べるという観点から考えてみます。まず、作物の種類は米、小麦、豆類、野菜、その他柑橘類が主で日本とあまり変りはない。揚子江から南方へ行きますと大体米作中心で、主食は米です。また農作物の栽培方法も、別に違いはないし、畜産や水産も、多少の違いはあるても大体同じで、共通性が主体となつてゐる。それでは中国の農業はいつたいどこが日本とちがつてゐるかと言いますと、それは「生産組織」がちがつてゐるのである。日本でも協業經營とか生産集団とかその他集団的な經營組織のようなものが出来てゐるようですが、基本的にほんと自作農を中心とした生産組織となつてゐる。ところが中国のばあいは、土地や生産手段の所有形態が殆んど集約的になつていて、人民公社と呼ぶものによつて生産がなされている。この点が日本とちがつた点だと思うのです。ですから中国農業の特異性をはつきり認識していくためには、人民公社という生産組織はどういうふうになつてゐるかを、一応頭に置いてからなければならぬと思うのです。

人民公社とは 人民公社と言つてもやつぱり人間による生産組織である点では、日本の自作農形態や、イスラエルのギブツと本質的な違いがないわけです。なんだか人民公社とは特別のものであつて、人民公社になつてしまふと途端に生産があがり、なんでもうまく行くんだというように言う人もあります。反対に、人間の土地所有本能を無視した強制だから、それが失敗のもとで、そのため生産力は

減退したと言う人もあります。しかし私はいずれも当つておらないと思うのです。

一般的にいいまして、その場所で、その歴史的な条件下で、どうしても生きてゆくためには、こうしなくてはならんという生産組織なり形態があると思うのです。こういうところから特異性が生じてくるのです。共通性が主となつてゐるところに、この特異性が加わつて特徴を表わすということになる。大体その程度の問題だと思います。だから、日本との違いとしては、土地の所有がどこに属するか、利益配分をどうするかということにある程度の相違が出てくる。したがつて中国が人民公社をやつたから、日本にもそういうものを持つて来てやれば、生産がたちまちたかまるというような事は全然ないと思うのです。それでは、その人民公社といふものはどういうところから出て來たか、この事を考えてみる必要があると思います。人民公社の生いたち 人民公社はほとんど全国に行きわたつてしまひましたけれど、初めは互助組といふものからはじまり、これが合作社になつたのです。しかし全国一齊に互助組になり、それから初級合作社、つぎに高級合作社になつたというような画一的なものはありません。日本と戦争している間にも延安付近にはすでに合作社が出現していなんです。だから一九四九年に中華人民共和国といふものが出来て土地改革などやりましたが、その時すでに合作社は存在しておつたのです。もちろん全然なかつた所もあつたわけです。しかし、しだいに初級合作社がふえ、それがある段階に来ますと、かなり急スピードに普及して行つたのです。あんまり速かつたので、これは強制でやつたのではないか、あるいは帳簿の上で作ったものではないかと、初めはそういうふうに疑がわれていたようです。と

ころがそれがなかなか基礎を持つております。けつきよく足を大地に下した人民公社にまで発展してしまつたのです。これが現在の生産組織形態になつてきております。これを単純に失敗だ成功だと評価は出来ない気がするんです。やはりああいう条件下においては、このようにするより他に、二億以上の貧農が飯を食つて行く道がなかつたと思うのです。これが実情であると思います。

中国のスケールと判断の規準 往々にして中国を観察する場合、その大きさについての感覚が抜けてしまうので、日本と同じような規模、水準を標準にして、向うの現象を判断、理解しようとするから、ずい分不思議なことになつてくるのです。ある学者の人民公社を見た報告会では、人民公社を全国について見て廻つたが、全部ちがう、統一がとれていない、だから失敗であると結論しておられました。私はそうじやなくて、全国統一がとれていないから成功するだろうと思いました。何故かと申しますと中国は九五九万Km<sup>2</sup>あります。西ヨーロッパの大体三倍か四倍くらいある筈です。だから全ヨーロッパ二つくらいあるというのが中国の状態です。人口で言いましても大体七億とか八億とか言つております。小さなヨーロッパ的な国家、人口が一千万とか、大きくとも三千万といつた国のお方と比較して、画一的な全国統一だとかなんだとかいう問題をとりあげるわけにゆかぬと思うのです。ヨーロッパの何十カ国を一齊に統一したり、同じ条件をあてはめるなどということは考えられもしないと思うのです。中国でも地方がいくつかの省に分かれており、この省自身が歴史的に長い伝統をもつた行政区画になつております。とか言語、風俗習慣には違いがあります。たとえば四川省などは、人口は一億ぐらいで、面積は五九万Km<sup>2</sup>です。つまり日本の一倍半く

くらいの面積で、人口は同じくらいです。人口についていえば山東省などは、五六〇〇万くらいで、イギリスに近く、河北省が四五〇〇万、河南省が四七〇〇万、少し前の統計ですが、江蘇省が四九〇〇万というわけで、フランスよりも人口の多い省がごろごろしているわけです。人口一千万前後の小さい省は二十三ぐらいあり、その他に少数民族自治区というのがあります。少数民族自治区というのは総面積で言いますと、日本の十六倍くらいにあたります。少数民族自治区というと、なんだかアイヌ部落みたいのがいくつかあるよう受けとられるけれど、とんでもないことです。大体大きさの概念がずい分違つてくるのです。

もう一つ例をあげますと印度との国境問題ですが、あそこには領土の境界線はないのです。マクマホン協定なんていうのがありますたが、これは地図の上にちょっと線を引いてみただけで、実際にはどこがどうであるか分からぬのです。日本的な感覚で申しますと、その辺の道路かなんか隔てて国境線があつて、お互いに争つてゐるみたいですけれど、その境界線の所だけ合わせますと、ベルギーの七倍半ぐらいあるのです。だから大分大きさの単位が違う。ですから中国問題は大きさを頭において考えねばなりません。

**気候風土の多様性** 私が日本に帰つて来たころ、ある学者がやつて来て「先生中国は寒いですか」と聞きますので、大変寒いし、丁度いいし、大変暑いと、こう答えた事があるのです。というのは私自身撫順の監獄おりましたが、ここは零下26度ぐらいから零下31度ぐらいになるのです。それで釈放されて帰つて来る時、綿入れを着てそこを出発したのですが、上海から浙江省、いわゆる江南の地へ来ますともう緑の真盛りなんです。それからつぎに広東へ移ります

と、夏の気候で、バナナやババイヤが実つていて、とても暑い。ほとんど同時に熱帯と温帯と寒帯が一しょにあるような所なんです。

だから中国は大変土地が広くていいですなあといふ人がいる。またよく言われる言葉ですが、一望千里の平野に赤い夕日が沈んで、大変あすこは幸福ですな、日本のように小さい所でこせこせしていってはいかんですなあと、こういうふうな感じを持たれる人があります。満州の平原も広いが、河北平原もかなり広いです。しかし全体から申しますと中国の平野の比率といふのは非常に少ないので。

大体山地が多いので耕作地の絶対面積は大きいが、人口比率で見ますと大変少ないとことになります。江蘇省なんかは人口が四九〇〇万人、つまりフランスより多く、人口密度は世界といわれるオランダの三一六人より多いのです。こういうふうに實際はかなりの変化があるのでして、高い山岳高原地帯のコンロンやチベットから、大きな砂漠地帯、またひじょうな多雨地帯まで、全部ふくんでいるのです。だから南の方で田植えしている時には、北の方はもう取り入れの終つた状態です。ですから耕作方法にしても耕作の時期についても、その収穫量についても、土地の状態によつて、いろいろと違つて参ります。大きな国ですから各地方の特異性といふものをかなり持つてゐるわけです。ですからヨーロッパの何十カ国を集めたようなものだといふうに考えてゆけば、中国問題は少し分かつてくるのではないかと思います。私はそう考えております。

土地所有と集団化のはじまり 次の問題は集団化が始まつたといふ点にあります。人民公社といふものの生産組織形態を理解するためには、そこから考えて行く必要があります。これには中国が農村の貧農から出発したという点から考えて行かなければいけません。自作

農がおつて、かなり豊かに暮らしていたのを集団化して行つたと考えたら間違いです。たとえば日本は農地改革以降自作農が出来て、機械が入り、テレビが入り、自動車まであって、農業外収入で生活のほとんどが支えられている、兼業農家の状態が多い。統計上は農民といふ独立した生産者であり、かなり豊かに暮らしているわけです。そういう農民を社会主義の下に集団化するから、ここへ集れといふうにやつたとすれば、表面上は集団化ができるても、実質的には集団化にそむいて、自作の原則をつらぬこうとするから、必ず崩壊を来してゆく。だからそうした観点から見るに、中国も同じようになつてゐるのではないかという疑問を持つことになる。しかし中國のばあいこれと違つて、全たく自作農の経験がないわけです。

中国政府は、一九四九年のスタート以後、地主の土地を無償没収し、農民に分配しました。なんとなればそれらの土地は労働行為によつて獲得したものでないからというのです。日本では農民に分けたということには自作農もふくまれており、没収した土地は地主にも生活の立つ程度を与えた。それから富農の土地も全部取つたわけではありません。だから富農の経済的優位性というのはあまり失われなかつた。中国ではこれも先ほど言いましたように、画一的に全部取つたのではなく、大体において地主の土地を取り上げて、それを貧農と小農に分け与えたということです。なんとなれば貧農といふのは土地はほとんど持たない。それから小農といふのは全然持たないわけです。いわゆる雇われ小作です。これらに分けたんです。だから今までの中農とか富農には土地は与えていないんです。

**集団化の背景** ですから地主の土地を取り上げて個々に渡したものですから、全国的に全部自作農になつてしまつたわけです。この貧

農と小農も自作農になつたから、もう我々も豊かな暮らしが出来るんだと涙を流して喜んだわけです。ところがどつこいそういうかないわけです。いざ飯を食うという事になるとせんぜん食えない。なぜなら日本では地面が高いから、土地を分けてもらつたというと大変財産が増えたように感じますけれど、中国のばあい土地を分けてもらつたと言つても、今まで地主が持つていて、小作が耕しておつた土地をお前の土地だと札を立ててくれただけのことです。これが中國の土地改革です。だから貧農自身にとつて実際の労働と生活は今までと違ひがないわけです。ちがつて来るのは何かといふと、秋になつて収穫をした場合、今までには収穫量の六割から七割くらいは、地主に小作料として取り上げられておつたが、今度は農業税といふのを一〇%か二〇%納めればいいという事になつたわけです。

それではどうしたら生きてゆけるかといふと、秋の収穫をあげなければならぬ。そのためには鋤を入れて耕さなくてはならない。

そして種子まきをせねばならない。それには家畜が要る、その家畜は地主の持つていた奴をやつぱり取り上げて分配した。今まで地主の家畜といふのは、その地主の土地を耕す時にのみ使われていた。土地分配の後は一人に一頭づつ、一つ一つ行きわたることが出来ない。つまり四家族で牛一頭所有するとか、あるいは二家族で馬一頭所有するとかといふふうになつてくる。また私は鋤をもらいました。こつちは鍬をもらいました。あつちは鎌をもらいました。私はなんにももらいませんと大体そういう関係になつてくるわけです。だからここで鋤を入れて畑を耕して種子まきをしようとしたら、どうしても何家族かが集まらないと手が付かないわけです。あるいは国民党が来て徵發してしまつたとか殺してしまつたので、牛も何も残つ

ていなかつたといふ所もあるのです。そこでは牛馬の代わりにどうしても人間がすきを引かなくてはならんという事にもなります。

**合作社** そこで三戸とか五戸とかが集まつて、最初に出来たのが合作社といふのです。これならなんとか耕作が出来るわけです。それで秋の収穫の結果は、自作でやつておつた所より、一人あたりの分け前が多かつたんです。これは多いはずで、今までには女房とか女の子は畑に出なかつたんです。南の方はかなり婦人労働者は使われておりましたけれど、揚子江から北、とくに黄河以北の方は家庭の婦人などは畑に出る習慣がなかつたんです。しかししかたがないから畑に出て、とにかく秋の収穫をあげなければならんといふので必死で働いたんです。つまり投下された労働力はひじょうに多くなつたので、かなり綿密な管理が出来た。したがつて、収穫は前よりも少しいいといふ事になります。それを見て他の連中もこれは集まつた方が利益のようだといふわけでだんだん増えて、二年目、三年目になりますと、五戸か三戸くらいで出発したのが二〇戸になり、三〇戸になりして大きくなつた。だいたい貧農層や小農層で作られたわけです。三〇戸とか四〇戸とかいう一つの自然村落体の中の貧農、小農がこういうふうに共同した仕事をやるようになつて、それが少しづつふえていつた。この時期には中農はまだ入つております。中農以上は自作農ですから、割合に豊かに食つてゐる農民です。中農はちゃんと自分で食えて子供も学校に出せる。しかし貧農、小農は子供を学校に出すだけの経済力がなかつたのです。

**集団化以前の貧農の生活** そのころの生活程度はものすごく低くて、ちょっと皆さん想像がつかないかもしれません。そのころお出でになつた方はご承知かもしませんが、われわれの想像を絶すると言

いますか、泥でこねた煉瓦で家を作り、藁ぶきでその上に泥を塗つてある本当の小屋ですね。家具なんていうものは一つもない。茶碗が二つ三つ置いてある。それでこつちに水がめがあるくらいで、なんにもない。これが貧農の生活状態だつたのです。着物はどうかといふと本当に着たきり雀だつた。ひどいのになると三十年間一着で過したなんていうのがあり、今、博物館で陳列されています。

食べる物はどうかといふと、本当に雜穀類の雜炊みたいなものです。普通貧農の食べる物と言つたら、木の葉とか雜草とかその辺の野草を取つて来てそれに粟なりとうもろこしをたゝきこんで、一しょに煮たような雜炊を一日に二度くらいすゝれば、まあいい方だつたんです。私は戦後、捕虜収容所に収容されていた時、ユージという村に行つて泊る機会があつた。その家の食事を見ると、粟めしになにかおかずを添えているのです。見るとそれはニレの花をちょつと塩漬けにしたもので、風流のようですが、ちょっと苦くて、そんなどくさんには食えませんよ。それをおかずに粟めしを食つてゐるのです。私たちには野菜を煮てくれました。主食は粟めしです。それでずい分ひどいなあと言つたところ、その主人が冗談じやないと言うのです。昨年まではこんなカンファンは食えなかつたと言うのです。カンファンとは乾いた飯（乾飯）と書くんです。これは私どもが食べている炊いたご飯の事です。今年からやつと乾飯が毎食食えるようになつたと言うのです。これは決して特異性ではなくて貧農間の普遍性で、こういうところから出発しているんです。

初級合作社の形成と旧地主の抵抗 だから自作をしてかなり豊かに食つていた農民が集まつて集団化したといふ問題と大分違うわけです。さきに申したように生産条件が集団化されないと、食えないと

いうことで、集団化の方向にまとまつて来て、だんだん大きくなり、三〇戸、四〇戸と、自然村落の貧農層が皆入つてくる。このような初級合作社の時代は土地、家畜その他の大型の生産手段も私有なんです。しかし労働は集団です。分配は労働に応じてする。ところによつては各戸に平均に分配をしたところもあります。しかし初めての経験ですから、平均分配すると、家族の多い者と少ない者、労働力の多少や軽、重、などに差があるので、文句が出て、平均分配がだんだん変えられていつたわけです。それで労働点数制というのを発明して、どういう点数の労働をどれだけやつたと記録して、年末にこれを計算し、それによつて主として食糧を分配するというふうになつて来ました。分配を受けた食糧が個人でやつている者よりも少し多かつたというところだけがうまく行つて、だんだん加入者がふえたんです。この時にはまだ土地、生産手段は私有なんですが、これがだんだん発展して中農が入りだしたんです。ある本を見ましたら合作社が出来て農民の反抗にあつたと書いてありましたが、これは農民といふ概念を単純にもつてくるからそななるんです。農民の中の中農や富農が反対をしたんですね。いろんな形で反対しております。初めの頃は地主とか富農は暴動を起こしたり、武装暴動を計画したりした。これが一応おさえられると、今度はいろんな形の反抗を始めています。サボタージュもその一つです。こういう事がありました。ある地主出身者が鶏の管理をまかされたところ、無精卵ばかり作つてゐるんです。ですからふ化場へ持つて行つてふ化させるところ、みんな腐つて、かえらないんです。よく調べてみると、その地主は、一種の暗黙の闘争と言ひますか、隠微の闘争と言うか、にわとりの雄を隠して、卵をみな無精卵にしてしまつたのです。このよ

うな生産破壊的な反抗もありました。反対したのは中農から上、とくに富農地主だったのです。しかし貧農、小農は、それ以外に食う道がないものですから、必死になつて守つたわけです。

**貧農路線** この貧農が作つたのが合作社であり、人民公社であり、この路線を毛沢東がいわゆる貧農路線などと言つています。抽象的な言葉で言うと難しく聞こえますが、実際の具体的な内容を言つてみただけです。さて中農がだんだん入り出した。と言いましたが、それは中農の収入よりも、合作社の社員の方が少し良いという現象が出た場合です。しかしこれで一年たち、秋の収穫の分配をうけたら、中農として一人でやつていた時よりも少ないとなると、その中農はこれはいやだから出て行くと言い出す。これは人情ですわね。合作社が成功した所以はどこにあるかというと、出て行くと言つた時、どうぞどうぞという事で、決して「お前出て行つてはいかん」とは言わなかつた。一人でやりたいなら一人でやりなさい、われわれも出来るだけの援助をするという態度に出たんです。もちろん合作社の社員の中には腹を立てて、「あの野郎は裏切り者だ」と騒ぎ出す者もいたけど、大体そういう態度に出たんですね。中農は出でいつて自分でやつてみると色々問題が起つてくる。たとえば水利。水がこない、それで合作社の連中に助けてもらうとなる。あるいは日照りや、水害がある、そうした場合に独りでやつていると、どうしても手の施しようがなくて、合作社に助けてもらうことになる。そうなると、すまなかつたもう一度入れてくれるとなる。すると合作社はどうぞお入りなさいと、入れてくれる。ある所で、合作社というのは強制でやつたのではないかという質問を受けました。たしかに強制はあつた。どういう強制かというと、決して強制をしてはいけない

いという強制があつたんだと答えたんです。こうした事が成功の根本原因だと思います。人間というのは強制で利益をじゅうりんしても、表面は服従しますが内面では反抗して来ますから、決してうまく行かないですね。ことに分散した農民に対し強制で事を運んでも、決して実体は生れない。しかしながら実体がかたまつてきたのは、そういうふうな原則が貫かれたからだと思うのです。一人一人貧農なり中農に聞いてみると、その本心を言います。それは人間の心ですね。人間の心を中心にして問題を考えないと、実際生活なり社会の動きというものは分からぬと思います。私は観察の根本点をそこに置きたいと思います。

集団の力と合作社の成長 それでこの合作社がだんだん発展して来ますと、さらに問題が起つてくる。あすこの川からこちらへ水を引くという問題、またこの川は何時も氾濫して水害をおこすから、ここへ堤防を作ろうという問題、こういう事は村に永く住んでいる彼等の夢として、いつも存在していたんです。しかし単独に耕作をやつていてる時には、そういうことに手はつけられない。ところが三〇戸、六〇戸とまとまって來ると、労働力としても六〇人から百人となるわけで、此の夢を実現する可能性が出てきます。それで一部の労働力をぬき出して堤防を作つたり、水路を作つたり、そうした事がだんだん積み重なつてくる。その利益を受けるという事になると、入らなかつた中農もまた入つて来るという事になる。まあ発展のサービス・キユーレーションが行なわれて行くわけです。それでだんだん大きくなつて二百戸から三百戸という一つの村落が、自然村の集まつたようなものがみんな入つて来るという事になつたんです。この時はまだ富農は入れておりません。富農は単独でやつてゐる。地

主も単独でやつてゐる。そこで今度はもう少し生産を高めて、暮らしが豊かにしようという目標が出てくる。そうすると、此処に作つたダムよりももつと大きなダムを作り、もつと大きな水路も作りたい。それから適地適作もやろうという事になつて来る。そうなると土地が私有になつてゐる境界に畔があるのは不便になつて来る。畔を合わしただけでもかなりな土地が浮いてくる。そこでこの土地の境界線を取りはずす、つまり土地といふものは共有にしようじゃないかという主張が出て来て、高級合作社といふものになつたんです。それまでは私有ですから合作社に対して出資という形になる。土地とか家畜とかいうのは出資で、その出資分に対する配当金を受け取つたんですね。それで収入は個人の労働に対する配当と、出資金に対する配当に分れていた。ところが配当の算定の仕方が、合作社の長が富農出身であつたり、ごまかして入つてゐる中農出身であつたりすると、自分の家族にだけ都合のいいような配当をやるわけです。

この人たちはたいてい学校などを出て知識があるものですから、會議の時にうまく事を運んで、配当金の比率を土地に対する配当の方が労働に対する配当よりも少し良くしても、彼らには大変得になる人です。というのはたくさん土地を出資していますから。こういう事例が方々で発見されて、やはり土地を私有にしておくと弊害があるから共有にしてしまえというので共有になつた。そしてだんだん生産力が高まつて來たわけです。だから労働収入が大きくなつて来るわけです。そして、けつときよく高級合作社にかわつていつたのです。

高級合作社とその躍進 高級合作社と初級合作社の違いは、前者は土地とか大型の家畜とかが共有になつた事です。共有という事は國

有ではありません。合作社所有なんです。あるいは生産大隊所有、生産大隊といふのは合作社の中で幾つかの自然村なり村落なりを分けて作つてゐるもので。これの所有か、又は合作社全体の所有か、いろいろ具体的には違つて参ります。集団所有といふ事になりますと、土地の出資なり家畜の出資に対し、配当金はこない。配当金は労働収入だけになつて参ります。これが高級合作社です。それで人民公社ですけど、これは合作社が二、三百個集まつてといふのが普通だつたんです。そのうちにますます大型水利が必要になつて来る。もう少し大きなダムを作ろう。もつと大きな水害防止の処置をやろう。水路を作ろう、色々の計画が出てくる。それからもつと多角的に果樹園をやろうとか、工芸作物も作ろうとかとなつて来るわけです。そのうちに農村で工業が必要になつてくる。これはいわゆる大躍進といふ名前で言われていますけれど、工業を中心とした時代があつたんです。一九五一年くらいから戦後の回復期に入つて、ソ連からも三八六ぐらいの工場を買つて、工業を拡大して来ました。中国はほとんど戦争までは、九〇%は農業で一〇%ぐらいしか工業はなかつた。それも海岸線だけに集中しておつた。青島とか上海とか天津とかいうような海岸線に工業が集中しておつた。ですから工業品はとにかく都會からしか来ない。ところが中国といふのは、先ほど申しましたように大きな所ですから、青島とか上海から運んでくる輸送距離だけでも大変なんです。雨が降ると道路は泥濘になるし、馬車で運ぶと輸送価格がひじょうに高くなる。それで工業を方々に作らなければいけないので、内陸にもだんだん工業を作つていつた。

島の紡績工場で布ぬし、それを河南省の奥地まで持つて行くわけです。これは大変な距離なんです。日本の端から端まで運ぶような話になります。ですから西安などに紡績工場を作り、河南なり山西の棉花をそこで布にして、その地方の需要を賄うというふうになつていつたんです。これがだんだん地方的にとり入れられ、河南なり山西の棉花をそこで布にして、その地方の需要を賄うというふうになつてもいろいろな工業がおこされた。たとえばトラクターとか鋤や鍬などをどうやって作るかという問題ですが、安山の製鉄所で作った鉄を、都會の工場へ持つて来て製品にし、地方へ運んで行くとすると、とてもあの広い所では、容易なことではない。だから地方で作ろうじゃないかという事で、農村自分でトッチンカンで、色々作り始めたわけです。大躍進の中での小型製鉄所、つまり土法といわれるものの大普及運動をやつたんです。そこで各省全部、いたる所で小さな溶鉱炉を作り、製鉄をやり出した。この土法を失敗だと評価する人もありますが、なるほど大きな製鉄工業にはならなかつたという意味においては失敗かもしれません。しかし農村が自分で鉄を作る力を持つた事、そして工業なんていうのは全然考えもしなかつた人達の眼を、工業方面に向けたという点で、大きな力になつたわけです。それで鉄が出来るようになると機械を作ろうということになり、鋤、鍬はじめ色々作つた。トラクターなんかの修理もしょようと、いうので部品も作り出す。旋盤も作ろう。小さな流れを堰止めて、小さな発電所を作り、自分の村だけは電燈つけようという話になる。中央の計画にしたがつて配分を受けるには、十年から百年先になつてしまふからおれたちでやろうという事で、モーターの工場まで作つたりしていました。こういうふうに小さな工業が発達して行つたのです。

肥料もそなんです。肥料は日本からもかなり買うけれど、農村で肥効性の高いものを作ろうという事になつて、小さな肥料工場が到る所に出来ました。大体中国の肥料は堆肥に頼つていたんですが、化学肥料の良さを少しづつ認識してくると、自分で作ろうというわけです。それから調味料とか漬け物だとかの生活物資も、水利などに必要な煉瓦も作ろうというので、そういう工業が出来てくるわけです。だから在來の農民という概念と大分違つてくるわけです。

そういうものを全部統合して運営するといふことで人民公社とう形になつてきました。

人民公社への途 こういうふうにまとまつて来ますと、二～三千戸の単位になつて来ますから、かなりの人口と労働力と資金力を持つようになつて来ます。そしてかなり大型の水利も、工場の経営も出来るようになつてくる。それだけの力を持つてくるから、学校管理や治安警備も任せようという事になつてくる。もつとも警備を任せたといふ事は、警察が引き揚げて民兵にやらせたみたいに感じられかもしませんが、そうではないんです。元来中国の農村には警察は駐屯していなかつたんです。中国の農村は日本のように泥棒があつたり、強盗殺人があつたりしない。昔あつたといふのは地主が居つたからあつたんです。つまり取る物があつたわけ。盜賊では地主の息子や娘を人質に連れて行つて金品を強奪するドシと言うのがあつた。地主がいなくなつて、金とる相手がいなくなつたので、そういう泥棒といふものはなくなつたのです。中国に泥棒がいないと言いますと、なんだかみんな孔子が孟子みたいになつたように思われやすいが、そうした事情があつたのです。この頃は大分物もふえましたので取ろうと思えば取る物はあるんですが、人民銀行の預金通

帳なんていうのは取つたところで直ぐ分かつてしまふから使い物にならない。また日本人が観光団か訪問団で行つて、八達嶺へ行く途中、下っていたカメラが重いので、どこかへ預けたいと言つたら「ああこの木に架けとけよ、木に架けておいて帰りに持つて行けばよいじゃないか」と中国の人が言う。「こんな所へ架けておいたら、人にとられはしないか」「いや大丈夫、誰れも持つていきやしないよ」というわけで、その木に架けて見物して帰つて来たら、やはりちゃんと架かつていたそうです。写真機などは珍らしいから、そんな物を取つたら直ぐ分かつてしまふ。とに角そういう状態ですから、農村の警備とか治安とか言つても夫婦げんかの仲裁ぐらいなんです。治安という事で一番力を入れるのは、旧地主の反乱という事です。先ほど言つたようなサボタージュしたり、放火して倉庫を焼いたりしたので、そういう者を取り締るために民兵が居たんですね。民兵といふのは普通の貧農です。中農なんかは民兵にならない。民兵は家に鉄砲をかけてある。何かあると鉄砲を持って行つて取り押えようと、これが農村の治安なんです。こういう事も人民公社に任せようという事になつた。また学校については、以前は文部省のような所でやつていたけれど、通うのに半日かかるような所へつくられると教育が出来ないわけです。通える所へ造ろうとすると予算がない。それではわし等で造りましようと、人民公社で造り管理する事になる。こんなふうにして現在の人民公社が出来たわけです。人民公社という名前ですが、毛沢東なんかが人民公社を作れと言つたのでつくつたという説がありますが、実はそうではなく、そういう生産形態が全国的にかなり作られていたんです。

## 人民公社の発展と不平分子の出現 それは高級合作社の大型化とい

う現象をとりながら普及し、全国で大体四〇%ぐらいそなつて来  
つつあつたんです。そしてその傾向はますます発展するであろうと  
いうのが当時の見込みであつた。そして色んな名前をつけておりま  
した。人民公社あるいは共産主義農場など。中国は文字の国ですか  
らいろいろな名前をつけていたのです。毛沢東さんが視察をした時、  
河南省のある部落に人民公社という名前をつけていたところ、この  
名前はいいなあ、人民公社ハオーというわけで、人民公社と名前を  
変えようと、これが全国に普及したんです。高級合作社が結合して  
二～三千単位のものになつて人民公社になつたんです。しかしあま  
り大き過ぎると不便のようです。満洲のある所で作られた太陽とい  
う名前の人民公社は、一万三千戸ですか、人口で言うと三～四万の  
人民公社が出来たんです。あまり大き過ぎて管理が非常に困難で、  
また管理する指導者にもそこまでやり切れる人物が居なかつたとい  
うわけで、小さくするという話です。具体的に現実に即した事をや  
つていたように思ひます。人民公社の連中も不満を持つんです。も  
つと発展さし、もつと豊かになろうというのです。現在はまだ低い  
ですから、そういう不満を持つ。しかし人民公社という集団労働的  
なものはいやだから、それをぶち壊して個人主義の方に持つてゆこ  
うという不満は、中農とか富農とか地主の方にあつた。これは劉少  
鈞の路線とつながつていて、劉少鈞の勢力のもとにあつたんです。  
劉少鈞の部下といふのは大体、インテリゲンチャで、都会地におつ  
た人たちです。劉少鈞といふ人は戦争中ずっと敵後方地区と言いま  
すか、日本軍とか国民党が占領しておつた地区の地下工作を指導し  
ておりました。その部下は大体大学出のインテリゲンチャでした。  
趣味や生活内容においても地主や富農と共通性がある。芝居を見る

にも、小説読むにしても共通性があつた。食事にしてもこの人達は肉と卵とおつゆといふように二つか三つの皿を並べ、小麦粉で作つた万頭とか、うどん、あのミエンですね、そういうものを主食にして食つてゐる。そして私たちに話かけるにも、もうなんにもあります。せんのでと、言うわけです。貧農になりますと、とんでもないんです。そんな物は一年に一回食えるか食えないと、いう状態なんです。こういうように趣味や生活が合いますから、非常に仲良くなつて一つの派閥になつたんです。それが今度の文化大革命でワイワイ言われて倒されたんです。倒されたと言つても殺されたわけではないですから、その連中はそのまま残つて仕事をしています。しかしそういうふうな感覚や判断基準で仕事をしてもらつては困るといふので、いろいろ教育をやつた。教育といつても、ただ学校へ集まつて講義を聞くといふのではなくて、「実際お前働いてみろ」「それで貧農自身がどういう生活をしてとるか、一しょに生活したら一番よく分かる」と、まあこういう教育なんです。今でもそういう感覚が残つてゐる。劉少鈞の部下たちは都會で会議などやりますと、ホテルへ泊るわけです。日本のホテルとあまり違ひのないくらいのいいホテルをたくさん造つていた。ところが毛沢東の部下、毛沢東系統の者は全部貧農出身ですから、会議に行くといふと、手拭にとうもろこしの団子などを包んで持つて行き、お湯をもらつてかじつてゐる。夜ホテルへ泊るなんて言つたら、それは金がかかる。そういう金は自分の合作社や人民公社から出させるのは勿体ないといふわけで、馬小屋なら藁があるだろうと、馬小屋をさがしてその藁を取り出して寝たとか、そういうように生活感情の違いがあるわけです。中農、富農、地主層とくに上層中農から上の連中は、劉少鈞を動かし

て、なんとか元のようにしてみたい、自作農にしたいと考えるんです。地主、富農、上農、中農は自作農に帰りますと、生活が高まり昔のようないい生活ができる。ところが農村人口の六割くらいを占める貧農や小農層は、そういうふうな生活をした事がない。これは夢の中でだけ存在したんです。地主がおらんようになつて自作になつたら、ずい分豊かになるであろうと夢の中だけで考えていたんです。だから日本のように自作で豊かに暮らして来た経験を持つた人の感覚と感情とはずい分ちがつています。単純に日本的に考え、農民というものは土地所有本能があるから、集団化されると生産意欲は減退するであろうという日本の観察とは大分違つてくるわけです。生産意欲そのものは、大変高い者と低い者といろいろありますので、十巴一からげに集団化すると生産意欲が高くなるとか、いや自作にすれば高くなるとか、そういう議論は成り立たないと思うのです。集団化して生産意欲の高まつた者と、怠けて、人がするから俺はそんなに働くんでも、もらう物だけもらえばいいよと、こういう人達との間にいろんな葛藤が繰り返されながら、なんとか今まで来たわけです。

中国農業のとらえ方 人民公社のことをだいぶん長く申し上げましたが、大体以上のようになつて来ると思います。これが日本の農業の生産組織とずい分ちがつた特異点であり、相違点じゃないかと考えます。それから基礎地盤として非常に大きな面積の中で行なわれている。すなわち寒帯と温帯と熱帯とを全部含んだような気候条件の差をもち、非常な高原地帯から、砂漠地帯、草原地帯、平野地帯、山岳地帯、又多雨地帯、乾燥地帯と、これらを全部ふくんだ広大な所に行なわれてゐる農業であるということ、それからその根本には

われわれと同じような人間が働いており、人間の感情を持つて事に当つてゐるということ、これら三つの事を合わせ考えてみると、大体中国の農業の概念が得られるんではないかと思います。

いろんな数字を見られても、それがうそか本当か、どういう事を表わしているのかといふ問題が出てくると思うのです。すべて書を読みすべてこれを信すれば、書なきに如かず、といふ古い言葉がありますが、ニュースを見、データを見て、それをすべて信するのなら、我々の頭がテープレコーダーになつたのと同じです。そうではなくて端つこの尖りを見れば、端つこでない平らな部分も見るという観察方法を適用して、今の各種の条件を考慮して問題を見れば、中国の実際の状況といふのがかなり正確に観察出来ます。それから今後中国がどういふうに発展し、中国の農業がどのように発展し、アジアなり、日本に対し、どういう影響を及ぼすだろうかといふことを予測するのも、そういう基礎から見て行きますと正確に把握出来るのではないかと思います。中国の農産物がドット日本に入つて來たら日本の農業がつぶれてしまうという議論もありますが、やはり人間ですから交渉によつてどうにでもなる。そういうようにさせてしまえばそつなるといふ事でして、そうさせなければそつならない。それにはどうしたら良いか、どういう処置をとれば良いかといふ具体的な処置を考え行くべきだと思います。抽象的に向うの農産物が入つて來たら全滅するんだと、ワアワア言つて単純に反対だと持つて行く必要はないと思います。まだ生産力の問題とか、農業の機械化の問題とかいろいろあるようですが、時間が参りましたので、ここで私の話を一応ストップさせていただき、あとは時間のある限り、皆様のご質問なり、ご意見なりをうけたまわつて、問題の

本質を明らかにして行つたらどうかと思います。

### 質疑応答

中田 それでは、今から質疑応答に入りたいと思います。

問 合作社全体として、あるいは人民公社全体として、こういう作物に中心を置いて行こうとか、そういう点について。

城野 これは合作社が初級合作社の時代と高級合作社の時代で違つてきます。大体三つの要素があります。それは政策として、米をどれくらい作らねばならんという事があります。八億の人間が食つて行くのですから大変ですよ。大体食糧生産というのが主任務になつて来る。金になるからと言つて、野菜とか工芸作物ばかり作つてもらつちや困るという要求も出ますから、それに沿つた線を一つとる。それからもう一つは合作社なり人民公社が、みんなに対して利益があるようといふのが考慮点の一つです。工芸作物を作つた方が利益になるので、よく議論をやつたようです。ある人は「国家の方針だから、それにならえ、そこへともろこしを作れ」と。ところがこつちの方は「棉とか、こんな野菜を作つた方が収入が多いから、これを作ろうじゃないか」というふうになつて大分議論するわけです。それをどつちが人民全体の利益であるかという事で決定しているわけです。第三の点は、初級合作社の場合には私有地に対する所有者の意見なんです。「おれの所、ズーット小麦作つとるんじゃから、他の物作つてもらつては困る」とか、いろいろ意見があつたようです。そういうものを調節しながら村の会議で決定しておつたようです。それで国家の方針は貫くが、個人の利益も尊重するという方針です。たとえば何かの調節点を求めるという時は、右なら右の端の

意見だけでガーット相手を抑えつけて行くと、後で必ず発撥を生みますから、なるべくいい加減な所で妥協して調節するような方針でやつていたようです。そういうところに中國の人間の在り方、問題の考え方がひじょうに良く出ているような気がします。

問 人民公社になつた今でも、まだ初級合作社と高級合作社は同時にあるわけですか。

城野 いや、それはありません。

問 そうすると人民公社の中に小さなグループがあるわけですか。

城野 それはあります。生産大隊から生産隊とあるんです。土地の所有形態なんかもまちまちです。生産隊の所有であつたり、生産大隊所有であつたり、あるいは人民公社の所有であつたり、所によつてそれぞれ違うようです。ある学者が訪ねて行くと、相手がみんな違うのでとまどつたという事です。こつちへ行くと土地が人民公社所有、こつちへ行くと生産大隊所有、さっぱり分からないと。しかしどれも本当だと思うんです。その区分についてはあまり厳格に考えておらないようです。生産大隊所有の場合には、その生産大隊の計画で、この土地に何を作るか、これからあがつた収入は自分たちで分けて、他へ流さないとか、計画するわけです。人民公社所有のばあいには、そこであがつた収入は各生産大隊に分けられる。生産隊であがつた収入は生産隊の構成人員に分けられる。ですから各生産隊なり、生産大隊によつて収入に差が出てくる事になります。

問 生産物の価格はどこが、どういうふうに決めるんですか。

城野 価格は市場で決まるわけですけれど、この点ひじょうに面白いので調べてみる必要があると思うのです。つまり価格がひじょうに安定しているのです。安定しているのは強制的に公定価格を作つ

て い る と 見 た ら 間 違 い だ と 思 う ん で す。公 定 価 格 を 作 つ て も 安 定 は  
い た し ま せ ん。必 ず 閘 価 格 が 出 て 来 ま す。と い う の は 供 給 が 足 り な  
い と な る と 必 ず 閘 価 格 が 出 て く る。実 際 上 の 売 買 に お い て 安 定 し た  
価 格 が 維 持 さ れ て い る と い う の は、い つ で も 需 要 に 見 合 う だ け の 供  
給 が 行 な わ れ て い る と い う 事 な ん で す。そ う す る と 生 産 と 流 通、輸  
送 そ の 他 が、か な り う ま く 計 画 的 に 行 な わ れ て い る と 言 え る わ け で  
す。工 業 品 に し て も そ う な ん で す。そ れ か ら 貨 币 価 値 が 非 常 に 安 定  
し て い て、物 価 は だ だ だ 人 工 的 に 下 が つ て い る ん で す。コ ス ト が  
安 く な る と 下 げ る。薬 な ど この 前 大 分 下 げ ま し た。簡 单 に 言 う と、  
需 要 に 見 合 つ た 供 給 を、か な り 長 く か か つ て 準 備 し、何 時 も そ う や  
つ て い る と 言 う こ と で す。し か し こ れ を ど う い う ふ う に 仕 組 ん で、  
ど う い う ふ う に や つ て い る か と 言 う の は 未 だ 私 に は よ く 分 か り ま せ  
ん。世 界 的 奇 蹟 で す か ら、か な り 問 題 に し て も い い と 思 う ん で す。  
問 東 南 ア ジ ア の 農 業 開 発 を 考 え る 場 合、中 国 が 国 際 舞 台 に 登 場 じ  
た 段 階 で、日 本 は ど う い う 所 に 着 目 し て 行 け ば よ ろ し い の か、お 考  
え を お 聞 き し た い と 思 い ま す。

城 野 わ れ わ れ と し て 気 を つ け な け れ ば な ら な い 問 題 が、そ こ に あ  
る か ど う か は 疑 問 で す。第 一、国 際 舞 台 に 登 場 し て 来 た と 言 う の は、  
客 觀 的 事 実 に 合 わ な い と 思 う の で す。实 際 中 国 は 国 際 舞 台 に は か な  
り 以 前 か ら 登 場 し て い て、六〇 何 カ 国 と ち ゃ ん と 国 交 を や つ て お り、  
バ ン ド ル 会 議、ジ ュ ネ ー ブ 会 議 そ の 他 の 国 際 会 議 で も か な り 活 躍 し  
て お つ た わ け で す。主 要 な 资 本 主 義 国 家 と は、ほ と ん ど 国 交 関 係 や  
条 約 関 係 を 結 ん で い て、交 流 が あ つ た わ け で す。い ち ば ん 最 後 ま で  
残 つ て い た の は カ ナ ダ と イ タ リ ア で し た。と こ ろ が 日 本 の 新 聞 は カ  
ナ ダ と イ タ リ ア が 资 本 主 義 国 家 と し て、初 め て 国 交 を 結 ん だ よ う な

印象を与える書き方をしましたが、実を言うと最後です。イギリスやフランスその他のヨーロッパ諸国は、ほとんど全部中国との国交関係を回復してしまつていた。ヨーロッパで今残つているのはスペインとポルトガルだけです。これはちょっと特殊な存在ですから、資本主義国家で残つたのは結局日本とアメリカだけになるわけです。だから国際舞台にはかなり前から登場しておつて、今度は国連の議席が回復されたと、これを加盟したとしている新聞がかなりあります。したが、中国人の考え方から言うと、加盟なんていうのはとんでもない、加盟はズット昔に、日本よりズット早くやつておるというわけです。あのアルバニア案も国連における中国の正当な議席の回復という事になつていますね。だからそういうふうに見ますと、今から事新しく問題は起らないような気がします。ただ国連という舞台が出て来る点が相違点です。この舞台をどう見るかによつて、ある程度の違いが出て来ると言えます。しかし今までと同じだと言う点が主か、それとも相違点が主になるかと言いますと、やはり今までと同じような点が主になつて來るのでないかと思います。そこにあら程度の変化は考えられると思うのです。国連という舞台ですから、東南アジア諸国との、そういう意味での付き合いがズット出て来ます。タイ、マレーシア、その他、中国との国交関係を回復して行く可能性があります。そうするとあそこには、まず華僑という問題があります。マレーシアなんかは大部分が中国人であるし、タイで経済勢力を持つてゐるのは、大部分が中国人であるという事実です。観察の主要点をそういう所に置かれるといいのではないかと思います。

問 労働の点数制度があるとおっしゃられたのですけれど、その労

効評価の問題についてお尋ねします。

城野 これも各合作社、各人民公社で、それぞれ工夫してやつてお  
り、大体に共通性はあるかもしませんが、それぞれの特異性をい  
ろいろ持っているんです。だいたいを申しますと、こういう仕事は  
一日何時間働いて何点と、たとえば土を掘るとか岩を崩すとか、危  
険な肉体的エネルギーを消費するような仕事は点数が多いのです。  
しかしその辺を掃くとか、その辺で鶏を追つているとか言うのは、  
軽い労働で点数が低いわけです。それを一日何時間やつたら何点と  
いう事になります。それと働き方の結果の判定を加えるわけです。  
お前の仕事は六〇点満点だけど、これでは四〇点しかないとか。こ  
ういう評価法が積み重ねられて、経験の中から出来たようです。こ  
れを年間集計して点数を出す。それによつて分配すべき収穫物を分  
配する。収穫物のうち一部分は税金に納めます。農業税というものは  
初めは二〇%ぐらいであつた。これで工業建設をやつたのですが、  
だんだん減つて来て、工業自体からの収入で工業建設が賄えるよ  
うになり、今では財政の七〇%から時には八〇%ぐらいは、工業か  
らの上納金になります。日本で言えば法人税ですね。これで賄つて  
いますので農業税は今五%ぐらいに下がっています。こういうものを  
を除いて、後は合作社の共同積立金として残し、生産施設その他へ  
の資本投下にするとか、福祉施設、学校その他に使うとかし、その  
残りを個人分配にするわけです。この個人分配すべき部分を、点数  
で割つて分配しているのです。

問 相当個人差はあるんでしょうか。

城野 個人差は必ずあります。よく働く者と働かない者の差。土  
地の出資については、土地の良さと大きさで算定しますから、いい

土地を出資した者とそうでない者の差。それからよく働く牛と働く牛では点数の差があります。そこで収入がずい分ちがう。それから労働も、よく働く家族の多い者、労働供出の多い者は、そうでない者とずい分違つて来ます。

問 二点おたずねします。一つは中国が統計的な把握が、ひじょうに難しい状況にあると思うのです。それがどの程度なされておるかと言うこと。第二点は東南アジア等に対し、中共がいろいろ経済協力するようになると思うのですけれど、中共の経済協力の展開の方について、どんなお考えを持つておられるか。

城野 第一の点は中共統計局というのが出来ていて、かなり正確な数字をつかんでおるようです。発表はしませんけれど。何故正確な数字をつかんでいるかと言えば、全国の生産は人民公社でやりますから、人民公社の責任者は自分の所でどれだけの物を作つて、どれだけ出来ているかは良く分かるわけですから、割合とともに報告するでしょう。これは私の推察です。それから資料なり、統計的数字はかなり集積していると思うのです。何故発表しないかと言うと、今ソ連と戦争危機にありますし、アメリカとはズーット冷戦を続けていたし、日本との間には未だ戦争状態が終結しておりません。いつ攻めて来られるか分からない。大体こういう事ですから、一種の戦時中の国家であり、彼等自身はそう考えている。だから発表しない。敵に知られては都合が悪いと思うのでしょう。それから生産計画は大まかな所は作つてあると思うのです。

食糧生産はとにかく世界人口の四分の一を占める七億から八億の人間に、餓死者を出さないで、食わしていると言う事実から問題を観察する必要がある。これは大変な事実だと思うのです。統計数字

で言うと、昔の中国の農産物は一億三千万トン～一億四千万トンだった。今二億トンは生産されています。統計数字ですから漠然としたものですが、二億トン出るとかなり余裕があるのです。そこへ五百万トンの小麦を輸入しているから、食糧不足じゃないかと言う見方があつたようですが、五百万トンという数字と小麦という品目に着目する必要があると思う。小麦というのは中国では高級食糧なんです。南方では食べない。北方なんです。北方では小麦と言うのは一年に一べん食えればいい、高級食糧品だつたです。今でも高級食糧品である事に変りはない。それと五百万トンと言う数字ですが、中国は昔から食糧の輸入国だつたんです。しかも小麦中心だつたのです。だから五百万トンの小麦は不足を賄うと同時に食生活の向上と言いますか、そういう内容を含んでいるわけです。それから二億トンとか二億四千万トンという膨大な食糧の数字から見ますと、五百万トンという額はそう大きくない額です。

それから第二の問題は、つまり人民公社などと言う生産組織、社会制度的なものを押しつけるような協力になつて行くのかどうかと言ふ事ではないかと思いますが、そうしたことはやらないと思いません。と言うのは今までやつておりません。それで農業技術の援助はなるべく相手に役立つようなものをやつてやる。これが主旨になつています。実際もかなりやつてているのです。たとえばアフリカに稻作の技術援助で技師を派遣したり、モロッコにお茶類を作つたり。モロッコはお茶からビタミンCを補給するので、かなり消費量があつて、これまでフランスの商人が中国のお茶を大量に輸入しておつたのです。ところが中国と国交が開けて来ますと、あんたの国は土地気候上条件がお茶を作るのに適合しているから、作つて

はどうだと言うので、中国から技師が苗持つて行つて植えた。それが育つて今ではモロッコでお茶がとれるようになつています。

それから援助の特色はどこにあるかと言うと、派遣される技師などには全部条件がついているんです。どういう条件かと言うと、受け入れ国の、同じ程度の技術を持つた人の収入と同じだけの俸給という約束なんです。中国から来たから特別にやつてもらつては困るじめない者は行つていないので。これは受け入れ国からも大変感謝されているようです。そういう所から見ますと、今後東南アジア諸国にそういう関係が出来ても、やはり同じ方針で行くのではないかと思います。それで平和共存、平等互恵をモットーにしていますし、相手国の内政には干渉しないと言うことですから、どういう社会制度をとろうとも、お互に利益になる事をやろうじゃないかと、この方針で今までやつて来ており、これからもそういうふうにやつて行くのではないかと思います。

中田 それでは予定の時間が参りましたので、この辺で今日の研究会を閉じさしていただきます。どうもありがとうございました。

## 海外農業ニュース（十四～二八号）索引

### I 座談会・提言および特集

今日の提言 渋沢信一 ..... 14号

ミツゴロ特集 ..... 14号

南スマトラ、ランボンのミツゴロ農場開発について（講演）

大原 寛

ミツゴロ農場のあらまし

ミツゴロに注ぐ日本の眼

一、民間商社と政府の眼

二、財団からの訪問者の眼

三、事業担当者の眼

四、学者の眼

五、新聞記者の眼

### 東パキスタン特集

東パキスタン農業協力研究会記録

農業近代化と農村の変容（アジ研） 桐生 稔

東パキスタンの引あい 一番機で帰国した専門家の話

農業使節団の十五年と農業技術訓練センターの十五年

政府ベース農業技術協力特集（II項参照）

今日の提言 安西正夫

企業農業特集

企業農業の意義 岩田喜雄

北スマトラにおける企業農業（調査報告）

インドネシアのプランテーション概説（大戸元長）

17号

17号

16号

15号

北スマトラのプランテーションの現況（平川正直）

インドネシアの養蚕事情（久津間 伝）

プランテーションとどう取りくむか（大戸元長）

ゴム  
（成瀬慎一）

オイル・パーム  
（浜上吉雄）

コーヒー・カカオ・茶  
（長戸 公）

タバコ  
（星子 大）

スマトラ東海岸州における農業発展史（西村昌造）

### 林業特集

海外森林開発推進事業の構想

左達一也

森林伐採跡地利用について（座談会）

テレビNHK・海外森林開発競争

NHK 海外班

カリマンタンの熱帯林開発現場

高須 久

インドネシア森林開発現場の医療と衛生

小林準之

空中写真から熱帯林を調べるには

中島 巖

### 農機具特集

発展途上国における農業機械化

前田耕一

海外向け農機具（座談会）

発展途上国における農業機械化の諸問題

岸田義邦

アジアにおける農業機械化の経済性

柳田友輔

アジア各国の農業に見合う機械化

上条盛雄

日本の農機具の南方適応性

日野茂樹

日本の農機具の販売と普及

坂本正雄

### ランポン特集 その一

20号

ミツゴロの太田社長・大原前社長をかこんで（座談会）

18号

ミツゴロ第三農場の開墾から現在まで 後藤隆郎

南方開発の夢を寒河江善秋氏に聞く

ランポンの土

最上 章

ランポン特集 その二

21号

ランポンの農業開発に寄せて 千葉弘見

下川善之

ランポンの地形と水利

22号

ランポン特集 その三

大畠幸夫  
大戸元長

ランポン総合開発の考え方

大戸元長

タイのトウモロコシの教訓

中田正一

アメリカのコーンベルトの教訓

23号

肥料特集

日本の肥料輸出現況表

23号

熱帯農業と肥料（座談会）

大津寛男

23号

肥料輸出の現状と問題点

潮田常三

23号

海外の化成肥料事情について

平野俊

23号

東南アジアの肥料問題への提言

今泉吉郎

23号

インドにおける肥料バイロット・スキーム

西垣晋

23号

熱帯地方の施肥問題

農業特集

24号

世界の農業と農薬事情

石倉秀次

24号

東南アジア諸国の農薬使用状況

村山隆成

24号

農薬規制の方向

後藤直康

24号

東南アジアの病害虫防除の実情

河野達郎・水上武幸

24号

発展途上国への農薬輸出について

鳥越毅

24号

オイルバーム特集

24号

オイル・バーム（ベルネエグ教授原著・佐藤孝教授訳）

ランポン特集 その四 ..... 26号

ランポン農業開発基礎調査団報告会

ミツゴロ研修生の研修報告

ランポン州視察旅行報告

中田正一

（付）ジャワ、スラベシ、タイ国視察旅行報告

中田正一

オイルバーム特集 その二

27号

スマトラのオイルバーム園について

浜上吉雄

スマトラ、アジヤム園の経営について

宮地勝彦

スマトラ東海岸におけるオイルバームの工場について

沼尻修一

最近のスマトラにおけるオイルバームとオイルバーム農園の開設

平川正直

最近のサバ地区のオイルバーム

植松真一

わが国における油脂事情ならびにバーム油について

今村正男

最近のオイルバームの技術革新、特に新品種の改植

西村昌造

## II 政府ベース農業協力

政府ベース農業技術協力特集

16号

フィリピン

インドネシア  
マレーシア

タイ

カンボジア

ラオス

ベトナム

インド

パキスタン

セイロン

ネバール

### 水産における技術協力

農業協力のあり方（座談会）

16号

農協育成計画によるメイズ等開発計画（タイ国）

アジ研 野中耕一 16号

政府ベース農業技術協力特集

28号

### 国際間の経済協力の動き

日本の経済協力の現状

政府ベース農業技術協力の経緯

政府ベース農業技術協力の紹介

ヨーロッパ主要国における開発協力行政

農業技術協力のあり方（座談会）

III トピックス（国別）

トーメン（東洋綿花）スラベシへ進出

14号

フィリピン新四カ年計画における砂糖需給、生産予測

14号

チークの丸太からテーブルへ

14号

新ビマス計画の概要

15号

収穫労力の不足と機械化（ビルマ）

15号

タイ国第三次五カ年計画における必要援助額

17号

韓国の農業機械化計画

19号

|                           |      |     |
|---------------------------|------|-----|
| サバーのオイル・バームについて           | 植松真一 | 19号 |
| エステート部門における外資政策（インドネシア）   |      | 19号 |
| 躍進するインドネシア森林開発            |      | 19号 |
| フィリピンの公有地問題               |      | 19号 |
| ビルマのトラクター・ステーション          |      | 20号 |
| 温帶向け新品種IR-24、第五番目の品種IR-24 |      | 21号 |
| インドネシアのビマス関係ニュース          |      | 21号 |
| インドネシアの木材関係ニュース           |      | 21号 |
| バイラスに悩むフィリピンのIR系品種        | 尾崎忠  | 22号 |
| 曲り角に立つタイの米穀政策             | 野中耕一 | 22号 |
| フィリピンの農地改革法改正             | 浅野幸穂 | 22号 |
| 再発したフィリピンの米不足と比政府見解       | 浅野幸穂 | 23号 |
| 大農精神とは                    | 編集係  | 24号 |
| 「農業は大農に学ぶ運動」              | 浜勝彦  | 24号 |
| IV 資料                     |      |     |
| 昭和四六年度海外協力関係各省予算          |      | 14号 |
| ランボン州のあらまし                |      | 20号 |
| インドにおける土地改革と緑の革命（ベルグマン教授） |      | 22号 |
| ハワイ大学東西センター               |      | 23号 |
| ハワイ大学C C C T R            |      | 23号 |
| V その他                     |      |     |
| 海外農業セミナー開催要領              |      | 17号 |

海外農業に対する協力事業ならびに

開発事業に従事したい方

海外農業に対する協力事業ならびに

開発事業に必要な人材を求めている方

は本財団へご連絡ください。

海外農業開発財団は左の事業を行なっています。

- 海外農業技術者となることを希望する方の登録とプール
- 新人からの海外農業技術者への養成
- 待機中における技術のプラッシュアップに必要な研修費の貸付
- 海外農業の協力および開発事業をしている団体企業等へ優秀な農業技術者があっせん
- 海外農業調査団の編成、送出
- 海外農業情報のしゅう集、紹介

海外農業ニュース

昭和四十七年四月二十日 通巻第二十九号

編集兼発行人

石 黒 光 三

発行所

財團法人 海外農業開発財團

郵便番号 一〇七

東京都港区赤坂八一〇一三二

アジア会館内

電話 直通 (四〇一)一五八八  
(四〇二)六一一一

印刷所 泰 舍

1  
1

2  
2